

[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# でぽら

No.3  
'92年秋冬号





## 特集 ふるさと交歓 町村の交流事業

自分たちの住む地域の人達や都市・外国の人達との一歩進んだ新しい交流とふれあいの体験、各分野との情報交換、芸術や文化交流、農産物の宅配便、研修会等——各種の交流事業が村や町の活性化に大きな役割を果たしています。比較的早い時期から交流事業に取り組んでいる元気な町村やユニークな活動をしているグループ等を紹介합니다。



### ■町村の交流事業を現地にルポ

- ・古代の謎とロマンを秘め、九州の小さな山村が国際交流の拠点に(宮崎県・南郷村)——7
- ・山間部に農業ユートピアをめざす若者たち、自然王国・白滝の里(高知県・大川村)——10
- ・世田谷区民に見染められた美しい村の農業体験交流(群馬県・川場村)——13
- ・最高級の牛肉に「心」を入れて宅配(福島県・飯舘村)——16
- ・但東シルクロードはふれあいロード(兵庫県・但東町)——25



### ■カラフォト/町村の交流事業

- ・東大雪の雄大な自然とふれあう場に(トムラ登山学校レイクイン)——3
- ・厳寒の北海道ならではのホットな交流(天使の囁きを聴く集い)——4
- ・杉を生かして木工芸の里づくり(もくもくランド)——5
- ・星と語ろう、自然を育む大地と語ろう(ふるさと旅行村)——6
- ・北の自然と心の温もり「白い器」(オケクラフトのまち)——36
- ・世界の芸術・文化が出会う大自然の理想郷(利賀村)——37
- ・壮大な歴史とロマンが甦る(水軍・安東文化発祥の地・市浦)——38

### エッセイ 都市と農村の新時代 岩谷三四郎——18

- 自然・大地からの提案  
「ブナの林こ、おらどの生命」  
白神山地に生きる  
鎌田孝一——20



### 都会発・ふるさとへのメッセージ

- 「私たちは、こんなふるさと  
リゾートが欲しかった」  
アルムワールの発足——28
- 都市と農村の 人・物・情報の  
交流の場に  
ふるさと往来センター——30

### INFORMATION ●'92秋のフェア、シンポジウム●ちょっとユニークなふるさと便・他——33

# 東大雪の雄大な自然とふれあう場に

トムラ登山学校レイクイン(北海道新得町)



◆ミラーを生かしたユニークな施設、レイクイン。温泉を生かした露天風呂も(左)  
◆初心者向けの冬山登山



外からの参加者も多い。  
登山学校の研修会用にと建設したのが「レイクイン」で、当初は屈足湖畔に30人程度の宿泊施設をと計画し、ボーリングしたところ良質の温泉が豊富に湧き出てきた。そのため一般住民やスキー客も利用できる大規模なホテル並みの施設が作られた。平成3年12月末にオープンしたが、週末は超満員。入浴だけでも可とあって町内外からの家族連れも多く、1日600人という日も。登山者用の資料室、オリエンテーションルームも完備し、各種の研修会に利用できる。



●北海道上川郡新得町役場  
☎01566-5-2141

十勝川の源流と変化に富んだ山々、原生的な自然は動植物の宝庫で、山男やハイカーたちから、  
『残されたダイナミックな秘境』として人気を博している東大雪山。  
新得町は総面積1062km<sup>2</sup>という広大な面積を有し、その約80%が日高山脈北部の東大雪山岳地帯に属している。この雄大な自然を一般の人や青少年にもっと親しんでもらおうと、今年1月から「トムラ登山学校」を開設した。  
名誉校長は登山家の田部井淳子氏、校長は元教師で十勝山岳会会長の梅田賢明氏。月1回登山学校が開催され、1泊2日の初心者向けの冬山登山から、小学5年以上から高校生までを対象とした冬(夏)の自然体験学習、シルバー、女性を対象にした自然とのふれあい登山、山男たちによる3泊4日の美瑛岳雪上技術講習会など、各層向けのカリキュラムが組まれている。  
指導には北海道の山岳会の中から選ばれた約30名の人がボランティアとして交代で当たっている。定員は20名から40名だが、反響は大きく、道外からの参加者も多い。

# 厳寒の北海道ならではのホットな交流

『天使の囁きを聴く集い』(北海道幌加内町)



夜は職員たちの手作り料理で話がはずむ。



全国からやってきた若者たち、再会を期して記念撮影。



天使の囁きを聴く集い



●北海道雨竜郡幌加内町役場  
☎01653-8-2211



ライトアップされた白樺林はファンタスティックで北欧のよう。

マイナス20度、雪の結晶はダイヤモンドのように輝き、手でふれても決して溶けず、ふれあうと軽やかな音を発する。

北海道幌加内町は昭和53年2月に母子里の北大演習林所内で気温マイナス41・2度を記録したことから「日本最寒の地」として知られるようになり、数年前からこの最も寒い2月中旬に「天使の囁きを聴く集い」が開催されている。

約50年前に建てられた丸太で組んだ山小屋風の建物・学生舎と、ライトアップされた白樺並木。それだけでも冬の北海道の醍醐味が味わえると、首都圏から毎年のようにやってくる女性たちもいる。

北大演習林や役場職員たちが手づくりで用意した会食が深夜まで続き、地元や北海道の若者たちとの交流の場にもなっている。

翌朝、夜明け前に森へ行き、ダイヤモンドダストと天使たちの囁きを見学する。

日中はソリに乗ったり雪の造形を楽しんだり町内を見学したりして一日楽しむ。

また、秋には紅葉の森で動植物にふれあう「紅葉まつり」が10月に開催されている。採れたての農産物や山菜の手作り料理が嬉しい。

# 杉を生かして木工芸の里づくり

「もくもくランド」(宮城県津山町)



ピラミッドやブランコなどの木製遊具は大変人気がある。丸木を使った素朴な遊具もある。

15mの高さを持つ天井は杉の香りがいっぱい。イベント会場としても利用できる。

津山町は太平洋から吹く湿気のある風を受け、杉の成育が早く、昔から木工業が盛んな町だった。その杉のすばらしさを見直し、町の活性化のすみにしようとして、「木工芸の里づくり」をすすめてきた。その拠点が、10年ばかりで建設してきた「もくもくランド」。平成3年4月にオープンしたが、入場者は年間30万人を超え、売上年商3億円。気仙沼観光の新しい目玉として人気を博している。

杉を使ったピラミッド群、ディスプレイ、アーチ式の大橋、観光物産館「ゆうキャビン」、テイルラウンジ「停車場」などの施設の他、木片をならべた「木レンガ」の道など、時間をかけて作った「杉づくし」の里である。子供たちが自由に遊びながら木のぬくもりにつれてほしいと、園内には遊具施設も多い。高齢者の加工活動施設「ふるさと食品加工普及所」もあり、ここで加工された木工品(はしおき、器箱、ベンチ、テーブルなど)は杉の木目とかわりにあふれた高級手づくり品として好評を博している。また、主婦たちが作る「ふるさと産品(油麩、麦こがし、漬物きのこと)」も順調に売上げをのびしている。



●宮城県本吉郡津山町もくもくランド ☎0225-69-2518

もう一つ、注目されることがある。「もくもくランド」の建物は、今まで廃材となっていた間伐材を中心に作られたもので、木造建築やログハウスの人気を反映して、建築依頼や問い合わせが全国から寄せられていることだ。

JR気仙沼線

柳津駅下車。緑

濃い杉山のふもとに出現したおとぎの国のような。

# 星と語ろう、自然を育む大地と語ろう

久万高原「ふるさと旅行村」(愛媛県久万町)



古城の跡に建設された星天城、プラネタリウムがある。



旧民家、土蔵、辻堂などの民家村。体験実習会が開かれる。



星の観察会が開かれている天体観察館。



町では昭和49年に国民宿舎「古岩屋荘」を開設、52年に松山市を中心とした都市からの日帰り客を対象とした自然休養村「ふるさと村」を建設。さらに年々施設を拡大整備しながら「ふるさと旅行村」とし、野外コンサート、キャンプ、りんご園、きのこと狩りなどの事業にも熱心に取り組んでいる。ケビンやキャンプ村利用者も多くなり、来訪者は年間30万人に達している。

町内にはクルマでやってきた男女や中・高生生の団体グループの姿が目立つ。この「ふるさと旅行村」の開設で商店街も見違えるばかりにおしゃれでナウい装いとなり、観光客で賑わっている。著名作家の絵画を揃えた久万美術館もぜひ訪ねてみたい。



●愛媛県上浮穴郡久万町大字下畑野川  
ふるさと旅行村 ☎0892(41)0711

四国地方の自然休養村「ふるさと旅行村」としてユニークな町おこしをすすめてきた久万高原旅行村の一角に、またまた新しい施設がオープンした。小高い山の上に出現した「星天城」と天体観察館である。

城の中にはプラネタリウムと展望台、天体に関する資料室があり、プラネタリウムは1日3回上映。また天体観察館には600mm反射望遠鏡が設置され、毎夜星の観測会が開かれている。

久万町は愛媛県中南部に位置し、松山市に隣接した標高400〜800mの高原のまち。

# ふるさとと交歓



## 町村の交流事業を現地にルポ

환 잘 오셨습니다 紀全女子専門大学生 여러분 영



歓迎交流会で日本語で挨拶する韓国全州市の女子大生たち。

### 古代の謎とロマンを秘め 九州の小さな山村が国際交流の拠点に

南郷村は九州宮崎県の小さな村。その村がいま百済伝説に湧いている。その昔、朝鮮半島の百済王国が滅亡した際、王族たちが都を経てこの地に逃げのびてきたというその伝説は、この村で新たな息吹きを吹きこまれたかのようになり、訪れる人がなかつた小さな山村を活気づかせている。

#### 村に住む自信がなくなった

九州山地に囲まれたこの静かな山里に、百済伝説が湧きおこつたのは今から6年前。それは偶然生まれたのでも、突然湧きおこつたのでもなく、実は「仕掛人」たちによって綿密に練りあげられたシナリオがあった。

その「仕掛人」たちとは宮崎県東臼杵郡南郷村役場の田原村長をリーダーとする企画課の面々。百済伝説はこの企画課を中心として生まれた「百済の里づくり」の一大構想の核として位置

づけられたものだった。

「百済の里づくり」は、過疎化の進むこの村で、幾度となくとられてきた対策の中で、企画課のメンバーたちが最も力を入れてきた村おこしの構想だったという。

企画課主任主事の木原浩一さんは語る。

「過疎化の進む中で私たちが何よりも危惧していたのは、村民たちが、この村で暮らす自信や誇りを失なってしまうことでした。」

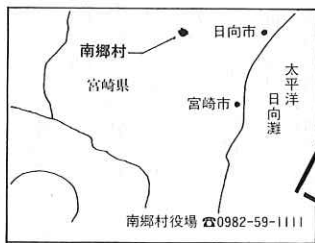
村民たちの自信と誇りの回復。これが村おこしの新たな主眼となった。そうした目で村を見つめ直してみると、村には沢山の歴史的遺産が残されていることに気づいたという。

「これだ、と思ったんですね。村おこしというと特産品や観光地の開発と短絡的に考えがちですが、そうではなくて、地味だけどこんな方向もあつてい

いと。」

村には朝鮮半島の古代国家「百済」が滅亡した際に、王族が移住してきたという伝説があり、その王族を祭神として祀った「神門神社」が中心にある。その伝説にちなんで国宝級の銅鏡や須恵器などの文化財、そしていにしえの時代から連続と受け継がれてきた王族親子対面の珍しい祭りが今も盛大に行われているという。

何もない九州の小さな山里に、「百済」のすぐれた文化をもたらした王族禎嘉王は、死後、神として祀られ、以来村民たちに親しまれてきた。「百済」は私たち南郷村の村民にとつ





◆▶韓国瓦が美しい「百済の館」。日韓交流のシンボルとして建てられた。



百済王が祀られている神門神社。この奥に「西の正倉院」が建てられる。

て、昔からずっと身近なものだったんです。その『百済』を自分たちの誇りとして打ち出すことを、村づくりの第一歩にしようと考えました。結果的にはさまざまな研究者や歴史学者、マスコミの方々、韓国からの交流団、韓国政府派遣による学術調査団など沢山の人が村を訪れて下さり、地元九州の観光客も月に1万人ほどが訪れるようになりました。」

資料の山積みされた役場の企画課で、木原主任は熱っぽく語り続けた。村では韓国との交流が盛んになり、南郷村の中学生が毎年韓国へ行き、また、韓国からもホームステイの学生や交流団がやってくるという楽しい国際交流が根つきはじめています。

### 祖先が会わせてくれた「出会い」

南郷村を訪ねたその日、村は韓国全州市からやってきた女子大生20余名を迎え、その歓迎交流会の準備で大わらわだった。会場は新築中の庁舎に隣接した多目的研修センター。学生たちは紀全女子専門大学観光日語通訳科というから、全員がカタコトの日本語を話せる。

彼女たちは歓迎交流会の前日南郷村に到着。一人ひとりが村のホストファミリー宅に民泊し、三泊四日のスケジュールで村に滞在するという。

歓迎交流会は3時から始まった。色鮮やかな民族衣装のチマ・チヨゴリに着替えた学生たちが入場すると、会場いっばいに割れんばかりの拍手が湧いた。会場を埋めているのは、村長さんをはじめ村の人々。そして昨夜からもうすっかり家族のように親しくなったホストファミリーの家族たちだ。

村長さんの挨拶があり、続いて学生一人ひとりが各ホストファミリーの家族とともに舞台上がり挨拶をする。誰もがたどたどしいが日本語で挨拶し、「ワタシノ、オトーサン、オカーサマデス」と愛嬌たっぷりにホストファミリーを紹介する。ホストファミリーの人たちは毎日勉強して覚えたという韓国語で、汗を拭き拭き大奮闘の挨拶を返す。

会場のあちこちに楽しい交流の輪ができる。笑い声、日本語、韓国語、ゼスチャーが飛び交い、会場はほのぼのとした雰囲気包まれる。

ホストファミリーの甲斐保男さんは「ホストファミリーの甲斐保男さんは「ホストファミリーの甲斐保男さんは「ホストファミリーの甲斐保男さんは」と笑い。崔恩珠さんのホストファミリー那須敏子さんは「明かるく礼儀正しくて、私たちが教えてもらうような点がとても多い。」と言い、恩珠さんは「韓国のお母さんとは違う優しさがあ。もつと言葉が話せたらいろいろ話したいのに残念です」と那須さんに甘えるような笑顔を向けた。

「長い間の老夫婦二人の暮らしにこんな若い娘さんが来てくれて、淋しかった暮らしに花が咲いたようだ」と話す老人。「韓国にも今度はぜひ来てほしい」と真剣に誘う学生。

やがて紀全女子大生の唄と踊りがあり、学生の代表が挨拶した。

——日本と韓国はこんなに近いのに、両国の間には悲しい歴史があります。それでも南郷村の皆さんとこんな素晴らしい出会いができたのは、きつと私たちの祖先がこうして会わせてくれたのだと信じます。——

拍手と歓声が会場いっばいに湧きおこった。そして南郷村の青年たちによる韓国の伝統芸能「サムルノリ」の見事な演奏。そのあとに続く南郷村の





韓国語やカタコトの日本語が飛び交うパーティ。

「いだごろ踊り」が始まると、もう誰もが居ても立ってもいられず踊り出した。チャ・チヨゴリの学生たち、村の老人たち、「サムルノリ」の衣裳のままの青年たち、ホストファミリーの家族。大きな踊りの輪が渦になってもの凄い熱気の中で揺れている。

そこには国際親善なんて言葉がしらしらしく思えるほど、人と人とのシンブルで素朴なふれあいがあった。溢れる思いや共感が、踊りの渦の中を埋めていった。

熱気の中で田原正人村長は言った。

「いろいろな試行錯誤はありましたが、『百済の里づくり』がこんな形で発展してくれることが、何より嬉しいですね。経済最優先という村おこしではありませんが、村民一人ひとりがこんなに充実した時間をもってくれた。こういうことがやがて村の発展につながるものと信じているんですよ、私は。」

### 主婦たち手作りキムチが村の特産品

南郷村を歩くと最初に目につくのが、美しい朝鮮様式の建築物「百済の館」だ。荘厳な社を構える神門神社。

その隣に建つこの館は、日韓交流のシンボルとして建てられたもので、韓国「百済古都扶餘」の国立扶餘博物館内「客舎」をモデルとして建てられたという。屋根瓦を韓国から取り寄せ、韓国からの職人さんの手によって作られたという本格的なもの。内部は資料を展示したり、おみやげ品を売ったり、また村の迎賓館としても使われている。

ここで売られている人気商品が、村の主婦たちによる手作り本格キムチ。村の主婦グループ「いそ路会」が中心となつて、白菜の塩漬けから本漬けまですべてを手作りする本場勝負のキムチ「百済王キムチ」だ。

「いそ路会」は美容院経営の長田タズ子さんをリーダーに、酒屋の宮崎ヒデ子さん、衣料品と新聞販売店を経営する田原論子さんの3人が主なメンバー。昼間はそれぞれの仕事をし、家族に夕食を作つて、夜8時頃から作業場に集合。キムチ作りは、韓国まで行ってキムチの生産工場などできちんと習ってきたという正統派だ。

唐辛子や、具に入れる松の実などは韓国からわざわざ取り寄せ、韓国と全く同じ方法で作っている。「百済の館」



キムチ作りの「いそ路会」メンバー。右が代表の長田さん。

に置いたら売れゆきが好調で、今ではすっかり人気商品になってしまったという。その上口コミで「百済王キムチ」の噂が広がり、宮崎県の県民生協からも引きあいがきて、取り引きが始まった。

「忙しい時には10人もパートさんを使つてね、それでも間に合わない位。ニククの皮むきなんかは村のお年寄りに頼むから、『小遣い稼ぎができる』って喜んでもらつてますよ。」と、リーダーの長田さんは言う。

### 今はまだ全体計画の1/10

大きく、多彩な人々をまきこんで動きはじめた「百済の里づくり」。古代史の謎とロマンを秘めたこの壮大な村お

こしは、まだ全体計画の1/10の施設が完成しただけという。

本命はむしろこれから。そのビッグプロジェクトは「西の正倉院」の建設だ。これは、神門神社に伝わる百済王族の遺品・銅鏡24面が、奈良正倉院の宝物と同一品であることや東大寺大仏台座下出土鏡、長屋王邸跡鏡など同一品であることから、この貴重な文化財を展示収蔵する博物館として、奈良正倉院の原寸大複製建造物を建てようというものだ。

門外不出とされていた正倉院図（設計図）を、奈良国立文化財研究所の協力により入手、造管用木材は正倉院と同じ檜を求めて全国各地を歩き、やつとのことで木曾檜を調達することができたという。

建築着工は平成5年5月。「西の正倉院」建築という日本初の試みが、いよいよ動きだすわけだ。原寸大の奈良正倉院。その、誰も経験したことのない正倉院の建築過程を、ここに来れば目のあたりに見ることができるのである。

人口3,000人の山里は、訪れる沢山の人々から新しい風を受けて輝きはじめた。子供たちの作文に「名前も知られていない南郷村でしたが、いまはいつも胸を張って南郷村といえます」と書かれるようになったという。

そのことが大人たちは何よりも嬉しい。



急峻な山あい建つ白滝の里。前方が自然教育センター

# 山間部に農業ユートピアをめざす若者たち 自然王国・白滝の里

大川村は高知市から北西部へ72km、愛媛県境に接する北部山間部にある。

昭和47年に日本鉱業白滝鉱山が閉山、続いて48年に早明浦ダムが竣工し、主要集落が水没した。そのため、昭和35年には4114人だった人口は急減、4分の1以下になり、高知県下で最も過疎の進んだ村になった。

村の存続さえ危ぶまれる中で、従来一人ひとりが主役となって村おこしがはじまった。

昭和57年から具体的な活性化対策の検討に入り、白滝鉱山跡地を総合開発して、そこに若者の定住促進を基本理念とする「自然王国」を作るプランを策定、事業は昭和60年から急ピッチですすめられた。その年を「むらおこし元年」と位置づけている。

さらに同年9月には、村と農協、和牛生産組合、木製品生産組合（木星会）が一体となり社団法人「大川村ふるさとむら公社」を設立、白滝の里の運営も含めて、地場産業の育成と若者の魅力ある就労の場づくりに取り組んできた。

人口が減ることが当たり前だった村にとつて、若者の数が一人増えることは、輝く星を10も100も得たことになる。

それが、いまでは自然王国・白滝の里で働く若者は、Uターンした青年以外に高知市や関西からやってきた農業に夢を持つ青年も加わって「若者のむら」と呼んでもいいほどになった。

言葉で語ったり、机上でプランを作るのはやさしいが、この壮大で夢のような計画を実現させた関係者と村民の努力と創造性、エネルギーには敬服するばかりである。

## 村おこしは村民の意識変革から

早明浦ダムの竣工で吉野川がおどやかにゆったり流れる村の中心街から、約7km北上した山間部に自然王国・白滝の里はある。朝谷川、大北川の溪谷美と杉や広葉樹のうっそうとした森をぬけていくと、突然霧が晴れて、赤や白、四角や丸形の建物などが出現してきた。映画のおとぎの国にたどりついたような気分である。標高750m、星に手がとどきそうな高原地帯である。

元小中学

校の校舎だったという建物改装

さらに宿泊や研修のための施設を増築した自然教育センターに、ふるさとむら公社のオフィスがある。

いる、いる、若者たちが大勢いる。みんな忙しそうにキビキビ働いている。現在公社職員は理事長以下26名。男女数は丁度半々で、みんな若く、20代が多い。

早速、朝倉慧理事長に話を聞いた。朝倉理事長は川村計廣村長の下でふるさと村公社づくりに手となり足となり努力を続けてきた元役場職員。公社設立3年後に役場を辞めて自然王国づくりに専念することになった。

「私たちの村が過疎になったのは、廃鉱、ダム建設が大きな原因です。

過疎対策といっても、一般にはまだまだ敵しさへの認識が甘く人口減少を





「死にものぐるいだった」と語る朝倉理事長。

阻止できないでいるのが現状です。私たちの村も人口が10000人を切った時、このまま全国各地にある過疎町村と同じような施策をやっているだけではダメだ、全く違う発想で、まず役場職員が、そして住民一人ひとりが意識変革をしていくことから出発しなければと思いました。このままでいいことは何も無い、死にものぐるいでやろうと。ふるさとむら公社設立と自然王国づくりは55年頃から企画に入り、60年から工事に着手、3年前にオープンにこぎつけました。

私自身は役場においては現場がやれないうと退職し、裸一貫になったつもりでここにきました。

白滝地区には鉾山で働いてきた人々の住いや学校がありましたから、それをまず生かそう、残石の山は整備してその上に、土を使わないでも栽培できるハイポニカ野菜をすることにしました。まだ試行錯誤をくり返しています。ここで本気にやろうという若者が

増えてきたことが何よりのはげみです」  
ここでは一人の存在が大きい。人材育成に特に力を入れている朝倉理事長の人柄と自然王国づくりへのロマンに共感して、都市から移住してきた若者たちも何人かいる。

### 校舎を改装して宿泊施設に

さて、簡単に白滝の里の施設とそこで働く人々を紹介しよう。

宿泊、研修をする自然教育センターには村の杉を使って木星会の人々が作ったテーブルや椅子がロジック風とてもおしゃれだ。かつて子供たちが学んだ校舎やプールも、ドレスアップして生かされている。

すぐ近くに昨年オープンしたのが屋内スポーツセンター。杉のやさしい肌合いと鉄骨、コンクリートの荒々しさを生かしたユニークな建物で、建築雑誌にも取上げられた話題の施設。多目的に使用できるように工夫され、舞台の奥に窓があり、山々の緑を映し込む。二階の杉のかおりにあふれた休憩室もすばらしい。

自然教育センターから上の方へ登っていくと大川村の産品販売と休憩所を兼ねた「里の茶屋」。この可愛い看板娘・和田陽子さん(24)は、しいたけ栽培で働く和田昌孝さん(25)と結婚し高知市からやってきた。レストランのメニューは盛り沢山だが平日は一人でとり



▲自然教育センターで働く皆さん。村の特産品を持ってハイポーズ。  
■廃校を整備して作られたセンターの宿泊、研修施設。



しきっている。

その近くには自然林を生かしたフィールドアスレチックと農園がある。せつせと草刈りをしている若者がいる。今年4月に神戸市からやってきた藪野友三さん(27)だ。

大学を出たあとフリーピンの大学院で農業を学び、大川村で農業をやりたいとやってきた。これからは農業が見直される時代です。農民が楽しんで生きがいをもってやれるような時代にならないといけない。ここで勉強し、将来はアジアの農民たちともネットワーキングしていきたいと思っています」と語る。東京にいる彼女に大川へくるように説得中だ。

センターでサービス部門や窓口係を

する元気いっぱい近藤京子さん(30)は、地元っ子。朝倉理事長の理念に共感して公社設立の最初からかわってきた。

「花壇づくりなど何でもやります。動くのが好きな私にはびつたりの仕事。ここは単なる宿泊施設ではなく、農業や自然とふれ、体験学習する場として活用してほしいと思います」

村民と特産品を開発したり研修活動をする「山の寺子屋」の座長としても活躍しており、一児の母。ゼロ才児の子供を朝保育園にあずけてやっています。ここでも女性たちはみなたくましい。

村内を案内してくれた事務局長の西村千津子さんは役場から派遣されたたひ



ハウスでトマトづくりにはげむ若者、主婦たち。

とり。事務処理能力の腕が買われ、ほとんどの現場へ出ている理事長に代わってオフィス事務を担当、また来村者の案内係もしている。

### ハイポニカトマトと地熱利用のしいたけ栽培が目玉

対岸の小高い山の上の丘陵地に11棟のハウス園芸施設がある。鉱山坑口跡地で、そこに山とつまれていた残石をならして、その上にハイポニカ（水気耕栽培）のトマト、青緑野菜の施設を作った。

最初の棟には、つくば博の時話題になった一万个の実をつけるトマトの巨木があり、隣室には、つた状になって10数mも横に伸びているミニトマトの巨木がならぶ。

種をまき発芽して実をつけるまでに約120日というプログラムを作り、

棟単位に出荷時をずらして年間を通して生産しているようになっていた。

冬にはマイナス10度になるので暖房費が大変だが、無農薬でかおりと甘味にあふれたトマトの評判はよく、ふるさとむら公社の一番の収入源と期待されている。

「トマトにはすばらしい生命力があり、水と太陽と、それにかかわる私たちの心のありようで立派な実をつけてくれます。見学者にもそのことがわかってもらえればと思っています」と理事長は語る。

このハウスでは常時5人の男女が従事しており、農業大学を出て高知市からやってきた東村英幸さん（25歳）、役場から出向の近藤淳さん（21歳）、香川県からUターンした近藤政徳さん（30歳）、松山市から子供連れでこの村にやってきて、山村留学児も引き受けている田辺英子さん、若い母親高橋章子さんがチームを組みキビキビ働いている。

市場に不合格の不ぞろいや小粒のトマトはビニールにいったばいつめて、村の主要路に設置された「良心市」（無人の市場）で100円で売られる。かおりと完熟の甘さにあふれたおいしいトマトである。

トマトのハウスからさらに5分ほど登ったところにはしいたけハウスがある。植菌したクスギやナラの木が70

00本あり、発芽を静かに待っていた。ハウスは2棟、他に収穫後のしいたけを乾燥、保存する施設もある。

しいたけ栽培の担当は和田昌孝さん（25）。工業高校を出て高知、神戸で働いていたが、ぜひにと言われてUターンした。彼の特技は水道整備士のライセンスを持つていること。

というのは、このしいたけハウスは室温が25度以上にならず、必要な湿度を保つために、坑口から流れ出てくる地下の冷気や水を施設内に引き込み活用している。水はスプリンクラーで屋根から散水し、施設とその周辺の湿度を約80%に保つ役目を果たしている。地下からの風は年間を通して12〜14度なので、冬は暖房の役割も果たしている。

「しいたけは温度と湿度管理が大切で、とくに暑さに弱いんです。地中の天然の冷気で育ったしいたけはとてもおいしいですよ」

彼は頼まれると村内外の水道管の修理や設置の仕事にも出かけていく。普段は一人で作業しているためマンネリ化しやすいと言いが、植菌や出荷時にはみんなが手伝いにやってくる。

### 和牛、木工品も人気ブランドに

途中の山あいには和牛生産組合が運営する近代的な牛舎が立ち並んでいる。「大川黒牛」といわれる高級和牛肉

の生産地だ。高原の新鮮な空気と緑草の中で運動しながらゆっくり育てられる牛たち。秋には大川村名物の謝肉祭の主役もつとめる。

白滝の里へくる途中には協同組合「木星会」の作業所があった。すべてを村内で採れる杉やひのきを使い、テーブルや家具などを作っている。訪れた日は、福岡市のジーンズショップを中心に作業がすすめられており、ここで生産された木工製品は東京池袋の東急ハンズにもならぶほど評判がいい。ベテラン職人に混って働くたくましい若い女性の姿もあった。

「木の質感と杉のかおりをできるだけ生かしたおしゃれな家具です。夏休みにはふるさと村公社へやってきた子供たちに、木を使って工作する楽しさを知ってもらいたいのので、木片を沢山用意して、指導に出かけたいと思っています」と川村理事長は語っていた。

大川村では、自然王国・白滝の里運営の他にも、ふるさと留学制度や、ふるさと村民制度（年4回村の特産品を発送する他、各種のイベントに招待）も設けている。

土佐のてっぺんにある自然王国。ここにはたくましい地球サイズの体験学習と魅力あふれる若者たちとの出会いがある。東京から出かけていく価値が大いにある村の一つだ。



群馬県北部の沼田市から日光・尾瀬方面に10キロほど、ここ利根郡川場村は武尊山の麓に広がる人口約4000人の純農村である。村内には花々が咲き、役場の玄関でも白いプランターの

### 情緒のある独特のたたずまい

群馬県の静かな純農村が「緑豊かな日本特有の美しい農村風景をもつ村」として東京・世田谷区に見染められて交流がはじまった。  
山村留学、小学生たちの林間学校、教師ら区職員の体験農業などが年間を通して行われ、10年間に延べ40万人が川場村を訪れた。



世田谷区職員の宿泊研修。石田りんご園で休暇。

# 世田谷区民に見染められた美しい村 農業体験交流

都忘れの花に迎えられた。

企画係の角田圭一青年と一緒に世田谷区民健康村なかのビレッジへ。昨年採用された世田谷区職員の宿泊研修が行われている。事務・建築土木・保健福祉関係など男女186人を二班に分けた研修で、この日はB組。

囲炉裏のある広間で健康村の紹介が始まる。角田さんがトップバッター。「要点だけ書いてきたので棒読みになると思いますが」と言うのと爆笑。「それでは」と座るとまた爆笑。屈託のない笑い声が場を一気になごませた。

川場村は昭和40年に46000人だった人口が昭和50年に38000人に減少したことを契機に「農業プラス観光の村づくり」を開始。自然休養村センターを整備、北海道からSL列車を運んで「ホテルSL」をオープンした。54年、世田谷区基本計画決定。重点プロジェクトの一つとして健康村づくり事業が始まる。56年、実現可能な適地候補52町村の中から川場村が選定され、11月に「区民健康村相互協力に関する協定」締結。「見染められて」選ばれた理由は、水と緑の豊かな、日本独特の農村風景のたたずまいを残していたこ

とによる。これは、教育熱心と評判の村びとたちが、農業を営んで守ってきたものである。

昭和57年、区民健康村拠点施設用地として富士山地区（ふじやまビレッジ、中野地区（なかのビレッジ）が選ばれる。レンタルアップル（りんごの木）のオーナー制度、へふるさと、バック、へ森のキャンプ」などの交流事業が始まった。61年、ふじやま・なかの両ビレッジ完成、4月開村。小学校の移動教室、一般区民の利用が始まった。この間、山村留学、川場村の環境アセスメント調査が行われている。そして昨年「縁組」10周年を迎えたわけだが、10年間に世田谷区民（80万人）の延べ40万人が「ふるさと川場」を訪ねて、心とからだをリフレッシュした。

### 感動を呼んだ 「川からのメッセージ」

角田さんの健康村紹介が済んだあと、世田谷区役所の区民健康村室主査の大西哲夫さん、川場村役場企画係長の宮内実さんが挨拶した。

どのような事業にも、成功の陰には無我夢中になる働き手がいるものだが、



このお二人がそれ。川場村と世田谷区  
の交流のスクリーンの存在で、昨年8  
月の4日間、「川からのメッセージ」と  
題して開催された10周年記念事業でも、



「俺たちやあ移動教室の先生だあ」と嬉しそうなお父さんたち。

黒子となって大成功に導いたのである。運営の1000人委員会結成で村内の若者の横のつながりができ、村の職員と区の職員の交流が深まった。若者たちは横浜太一村長に「口は出さずにカネだけ出してくれ、必ず成功させる」と約束し、目を輝かせて黙々と働いた。

ふるさとの川の復権をめざすシンボジウム、岩魚5000匹つかみどりの川のイベント、浪曲師・玉川福太郎や講師・神田紅、劇団・黒テントに地元への話の会が加わった(語りべの宵、川の中に舞台をつくってデビュー・エイセス、世田谷区の合唱団、地元の合唱団「へり子星」などが出演した(川のコンサート)。緑の下の力持ちの総務小委員会、食糧小委員会、輸送小委員会、交通警備駐車場小委員会などの汗。お母さんたちが2000個のおにぎりをつくり、お年寄りたちは、岩魚を獲るシカゴという伝統漁具をつくり、竹串1000本をつくって岩魚を焼いた。

みんな同じ思いであった。「これは健康づくりの集大成ではない、通過点なんだ。これから本当に豊かな心の耕しと暮らしの環境づくりを、川場村でも世田谷区でも共にやってくんだ」と。

しかし、ひとまず10年間の交流の実績・住民の評価をまとめると次の点があげられる。

- (1) 観光拠点施設の管理運営等を行うために(勸)川場村観光開発公社を設立。従業員19人(うち地元雇用15人)。
- (2) 区民健康村の管理・運営を行うため、村と区と共同出資で(株)ふるさと公社設立。資本金4000万円、従業員42人(うち地元雇用27人)。
- (3) 交流の拡大で来村者・観光客が急増(入り込み客数60万人)、みやげ品などの地場産業が育成された。
- (4) 川場村森林組合みみずく工房、従業員9人、平成2年度売上げ3000万円。
- (5) 中野加工場(ジャム、ジュース加工)、組合員6人、平成2年度売上げ3500万円。
- (6) レンタアップル348口。
- (7) ふるさとパック(年3回特産品宅配)200口。
- (8) 地鶏飼育。
- (9) 有機低農薬米の契約栽培など。
- (10) 交流をきっかけとして、川場村の農業の将来を大きく変えようとしている。
- (11) 世田谷区美術館の美術品を川場村で展示・ふれあいコンサート・和紙造形大学・森の書展など文化的刺激が得られた。
- (12) 交流を通じて村民が郷土の豊かな自然環境を再認識した。
- (13) 青年層の地域への関心が高まり、自主的な交流・学習が行われるようになった。10周年記念イベントの運営面での中心的に活躍したのは方言からネーミングした(開墾(あらく)塾)のメンバーである。
- (14) 農業指導などを通して高齢者に自信と生きがいが生まれた。
- (15) 川場村の豊かな自然環境と文化財の保護を図るために、村と世田谷区が共同で(環境保全基金)を設立。

このような取り組みによって、昭和50年に3822人まで減少した人口は55年の国勢調査では増加に転じ、平成2年には4085人を数えるに至ったのである。

「大事なのは村のこしなんです」

夜。満天の星。カエルの大合唱。

役場の前のプレハブ二階建ての集会所でリーダーの打ち合わせと財政小委員会が開かれた。昨年の「川からのメッセージ」の企画のとき、今後も一連の自然環境をテーマにしたイベントを催していこうと決めた。その第2弾、大地をテーマとした夏まつりの準備である。

財政小委員会では役場企画係の関清子さんが「6月8日に各小委員会から予算の不服申し立てがあがってくるよ。財政委員会は陸の仕事だもの、むずかしいね」とボヤキながらも、テキパキと会を進行させていく。彼女は昨年のイベントで一番うれしかったのは「村の人と友だちになれたこと。3歳離れちゃうと知らないから、あ、まだ若い人がいたんだって」と言う。いま彼女の隣の席にいるボーイッシュな感じの女性もその一人で、沼田市の銀行につとめているが、春もまだ早い頃から「今年もやるんでしょ」と待ちかねて、運営委員になった。

リーダー打ち合わせ会にはもちろん大西哲夫さんも宮内実さんもいた。今年のメイン会場はふじやまビレッジの近くの丘と草原。炭焼き窯をつくって炭焼き体験も盛り込み、木醋をつくってみようという話に花が咲いている。



りんごの摘花の要点を教える石田りんご園の主婦

木醋は木材を乾溜してつくる醋酸で、これを冬に催す土の勉強会で使おうというわけである。

「僕らがやろうとしていることは、村おこしじゃなくて村のこしですからね。村おこしする気はないんですよ」

念を押すように言う大西さんの目は、凄く真剣であった。川場村の桜川は利根川の源流である。どうしたらその清流を汚さずにすむか。大地を痛めずにすむか。生命の源である水と緑と土を守ろうとする健康村の決意を、その真剣な目に見る思いがした。雑排水は地下浸透式にして、ふじやまビレッジには生ゴミを堆肥に還元する先駆的なりサイトという工場を付設した。

村のこしというコンセプトが、大西さんや宮内さんたちのつよい絆となっ

ているのだろう。宮内さんは星空を見上げながら言った。

「もう少し国産の木材が高く売れば、山村がこんなに疲弊することはなかったんですよ。友好の森事業は、10年20年先を見据えているんです。いままでは東京農大(世田谷区にある)の学生有志が森林管理作業のボランティアを続けてくれましたが、今度は一般の人も含めて140人でやります。将来的にはどんどん増やしていきたい。都会の人が緑を守るために汗をかき、そんなことが質の高いレジャーだということのように愉しみ方も変わっていきますよ」

宮内さんの笑顔は確信に満ちていた。

### 「なにげなくりんごを食べているけど、大変なのねえ」

宿泊研修の2日目、研修生たちはいくつかのグループに分かれて、朝から夕方まで村内の各農家でりんごの摘花などの農作業実体験。石田りんご園のグループについていく。

「主人はいまいちこの出荷してまして、10時頃来ます」とのこと、奥さんが摘花の要領を説明する。幾本か出ている花茎の中心花だけを残す作業、高い所は箱や脚立に乗って摘む。ここはレンタアップルの畑で1000アールに5、600本の樹。オーナー契約は満杯である。りんご畑にする前はあた

り一面桑畑で養蚕を営んでいたが、そのほとんどをなかのビレッジの敷地として提供したので、残った桑畑にりんごを植えた。実りを待つ5年間、あるじは出稼ぎをした。いま息子は東京農大生、娘は保育大学生。二人とも卒業後は村に帰る予定である。

甘やかな大気につつまれて花を摘みとる作業は嬉しいが、これが仕事となると別だろう。研修生の一人が「なにげなくりんごを食べているけど、大変なのねえ」と洩らした声には実感がこもっていた。りんごの樹のオーナーから「花が咲いて、花を摘んで実がなつて、冬は雪帽子をかぶって春を待つというサイクルを子どもに見せることができ、本当によかった」といった手紙もくるという。

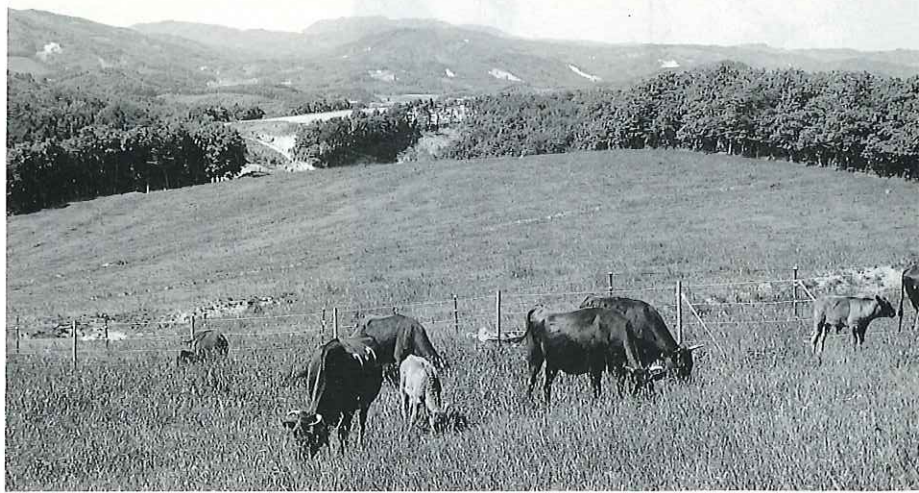
あるじの石田幸松さんが思ったより早く現われて、熱心に説明してくれた。「ほら見てごらん。りんごの樹はみんな接ぎ木で育てる。マルバハイドゥという品種は根が強いから台木は全部これだね。フジという品種をつくるにはこれにCG55という木を接いで、さらにフジを接ぎ木する。苗木つくるまでに3年かかって、植えてから収穫するまでには5年かかる。気が長くなっちゃでせん仕事だね。一時はりんごの木の高化(改良された小型の木)がはやったが、樹が低ければ作業はしやすいが毎年実らせると疲れちゃう、子ども

に重い荷を負わせて山登りさせると同じことだ」

川場村と世田谷区のこれまでの交流は、区民が村へ来ることにウェイトが置かれていたが、これからは村から区へ出ていく交流も必要だと関係者に指摘されている。幸松さんの話を聞いていて、こういう生命を育てる農業者の知恵を、都会の人づくり町づくりに活かさなければ痛感した。石田りんご園からの帰り道に出会った年配のお父さんたちにも、都会の心と環境の耕しをしてもらいたいと思った。広い畑で作業をしている農家の人に聞くと、移動教室に来た子どもたちに野菜づくりを教える予定だったが、雨にたたられたので自分たちで植えているのだと言う。2アールにブロッコリーを植え、他にコンニャク、サトイモ、ジャガイモ、サツマイモ、大根、ゴボウ、ネギなども植える。これまでの交流で「健康村で消費される野菜などは村外から調達されるものが多い。少量多品目」の供給ができる農家の育成が必要だ」と感じ、実践していくことになったもの。

「俺たちやあ結構な年寄りだが、遊んじやいられねえ。なんてたって、移動教室の指導をする先生だからなあ。アツハハハ……」

ぽっかり白い雲が浮かぶ青空へ、ほがらかな笑い声が立ちのぼっていた。



阿武隈高原で育つ飯館牛たち

# 最高級の牛肉に「心」を入れて宅配 ふるさと便「ミートバンクオリジナル」

この飯館村の名を高めているもうひとつのものが、「飯館牛」である。飯館牛の特徴は、やわらかく、味が深いこと。その味にくせがなく、また肉色が濃いことなど。最近では近郷の米沢牛や前沢牛などに劣らない評判を得ており、ブランドイメージも確立しつつある。

その飯館牛の名を広め、高めるきっかけになったのが、ふるさと宅配便の草分けともいえるミートバンク事業である。ミートバンク事業は、畜産、とくに和牛の繁殖の振興を図り、繁殖から肥育へと村内一貫体制の道を切り開くために昭和60年に開始された。最高級の牛肉を会員の自宅に宅配するもので、事業開始の当初に朝日新聞の全国版で紹介されたため、爆発的な人気を呼んだ。

はじめ「牛肉でいいたと手をつなぐ会」(頭取・村長)で運営されていた事業は、昭和63年に(勸)飯館村振興公社の設立、平成2年度には、農畜産物処理加工施設の完成に伴い全面的に農協に移管されており、名前も「MEET BANK オリジナル」と変わっている。

ふるさと宅配便「ミートバンクオリジナル」

る。事業を担当している農協生活課の高木正勝さんに話を聞いた。

## 最高の品質の牛肉を送る

「現在、牛肉の各部位につき、会員の方のご希望の部位、量をお好みのカットイングでお送りするオリジナル会員と、飯館牛と特産品をセットで年5回お送りするふるさと会員を募集しています。最近ではふるさと会員を希望する方が多く、また、これまで東京など関東の会員が6〜7割を占めていたのが、今年は仙台など東北の方が多いうです。遠くは大阪や岡山・広島の方でも、翌日配達ができるような体制をとっています」

「ミートバンクでは前金制をとっており、たとえば年5万円のコースならその分、好きな時期に好きな量の肉を注文できるシステムになっている。以前は固定的な定期発送だったが、現在は選択自由、常時受け付けとなり、より会員の選択幅が広がってきている。また、単品の肉のほかにワインナーやハム等の加工品、ヤマメや酒等も取り扱

っている。

昨年度は、  
延べ150  
0件ほど発  
送し、14  
00〜15  
00万円ほ  
どの売上げ  
をミートバ  
ンクだけであげたという。

村内では現在、農協組員8戸が60〜70頭の牛を肥育しているほか、村振興公社で350〜400頭を肥育している。豊かな大地に育つ肉牛は、飯館村のシンボルともなっている。

「会員の方に送る牛肉は、選りすぐった最高のもの、こちらの納得できるものをお送りしています」

ミートバンクの牛肉についてこう語る高木さん。その自信の裏には、各地の物産展などでの飯館牛の高い評価などもあった。

飯館村では年6回、偶数月の8日に牛のセリ市が行われているが、そこには米沢や山形、岐阜などで肥育されることになる牛もいるという。つまり、







ふるさと交流事業④  
町村の交流事業

全国のブランド牛の多くが飯館の市から育っているわけで、飯館牛がおいしいのは当然といえるのかもしれない。

さらに深い交流が必要

高木さんは、牛肉を発送する前に会員に往復はがきを送り、郵送日、肉の部位と量、ブロック・スライスといったカットイング方法等の希望を確認する。

「このはがきが会員の方と事務局をつなぐ交流の役目をはたしてゐるんですね。帰ってきたはがきに『おいしかった』とか書いてあると、やっぱりうれしいですよ」

以前は、東京の銀座で「会員のつどい」を開いたこともあり、そこで会員から意見を聞いたこともあり、最近では行われていない。しかし、最近では行われていない、ということ、いまひとつ会員の声がかいてこないことが高木さんには不満であり、不安のようだ。

「はがきなんかでも、もつといろいろと要求して書いてきてくれれば、それにてできるだけ応えるようにするんですが、主導権が事務局にあると思ってる方が多いのか、あまり書いてこない人が多いんです」

飯館村では現在、自前の部分肉加工センターの新設が計画されている。これは、「飯館牛」ならぬ「飯館牛」なるまがいものが登場するなど、知名度の

高まりによりひとり歩きを始めた「飯館牛」のブランドイメージを保とうというのが目的だが、このセンターが稼働すれば、農協の取扱いが現在の年間60頭から160頭へと、振興公社の取扱いが550〜560頭へと大幅に増えることになり、それはさらに経費の節減、人手の確保につながる。村ぐるみで取り組む体制が確立されることで、ミートバンクの一層の充実、さらに体験学習の実施などによる交流の深まりが期待されている。

なによりも、センターで一定基準のもとに加工された肉だけを「飯館牛」と銘打つことにより、品質への信頼性が高まることで大きな利点だろう。

「心」を入れて送りたい

飯館村では毎夏に「牛まつり牛肉フェスティバル」が開催されており、今年で9回目を数える。毎年4トンもの牛肉がそこで消費されるが、ミートバンクの会員はとくに格安の料金で参加できるなど、これまで飯館牛のPRに大きく寄与してきた。

ミートバンク自体も利潤よりも飯館牛のPRや、特産品の開発、都市との交流を重視してきた。そして、村振興公社の設立、農協の加工施設の完成、期待される加工センターの新設など、いわば、ミートバンクの成長の歩みは、同時に飯館村の成長の歩みでもあるの

である。

一時1500人以上の会員を数えたミートバンクも、最近ではブームが落ち着いたことと、とくに会員ということではなく、買いたいときに求める、という顧客が増えたこともあって、今年度は「とりあえず350人ほどの会員が目標」という。1500も1600もいると、とても一人ひとりに気持ちが行き届かないと、高木さんはむしろ現状ではこの程度の会員数が適当、と考えているようだ。

「ふるさと会員の方に6月はヤマメと有機野菜を送りました。次回はハウスものを送ろうと思っています」  
これらのメニューを考えるのも高木

さんの仕事。多忙なのにギスギスしたところがまったくないのは、この仕事を愛しているからなのだろう。  
牛肉の自由化で国産牛は高目の価格設定がしにくく、どの産地も苦勞しているが、ブランド牛としてはルーキーに近い飯館牛の場合は、むしろ勝負はこれからであり、踏張りどころといえる。

「同じ牛肉を送るんでも、機械的に送るんじゃおもしろくない。何か心を入れなさいと」

それでも、飯館村全体の声を代表しているような、高木さんのこんな言葉を聞くと、飯館牛と村の将来に力強いものを感じてしまうのである。

9回目を迎える「牛肉フェスティバル」



# 都市と農村の新時代

岩谷三四郎  
(広島県立大学教授)

明治以来、日本では「ふるさとを捨て、都会に出るのが立身出世の道」であった。それは、「神様が農村をお造りになり、罪びとの人間が都会を造った」と語り伝えられている宗教風土の国々との大きな違いだろう。

古くから欧米諸国には、農村が神に近い「善」のところであり、都会は「悪」の場所だという考え方があった。農村がしっかりしているのはそのためだろう。それに比べて、日本の農村のとくに最近の荒れ方はひどい。都会は進んだところ、農村は遅れているという考え方が、未だに強いためだろう。

明治以来の日本人のこんな都市観や農村観に、最近変化が現われ始めているように感じられる。都市住人のなかで、都市生活に絶望し、農村を見直す人々がようやく出始めているようだ。そんな最近の兆候が、今後都市と農村の関係を一体どんな形に変えてゆくのだろうか。

## 「望郷」と「捨郷」

「承知のように、世の中の近代化とともに日本の都市は大きく発展した。とくに、昭和三十年代からの発達が目覚ましい。その人為的に高度な展開をとげてきた都市で生活し、

その表と裏を知り尽くしてみると、そこから脱出したくなる人々がどうやら増え始めている。あちこちの農村を歩いていると、都会を出て農村に新しく住みついた人に出会うことが最近多い。

日々の生活に若干ながら余裕がでてくると、わが生活を改めて考え直してみよう。そのうえに、情報化社会である。生活の別世界を諸外国に探訪することが流行しているが、反面手近な足元で、先祖のふるさとと農村に、都会とは違った新しいライフスタイルの可能性があることに気づき始めている。そこはかない「望郷」の風潮が、都市住民のなかで生まれているようだ。

それに反して、農村の人々にはまだ依然として「捨郷」志向が強い。農村のふるさとを捨て、都会に出たいのである。極めて少数になった農村の若者たちでも、新規就職の場を大都会に求め、親たちも、それを当然のことと思って複雑な心境で子供たちを都会に送り出している。

できれば祖先伝来の土地を守り続けたいものの、まだ幼い子供の進学問題などを考えて、親子ぐるみで離村を決断する者もある。

## 「ふるさと交流」のズレ違い

都市と農村との間でみられるそんなゆき違いやズレ違いが、いろいろの機会に現われる。最近多い農村での「村おこし」の会合などで、都会にはない農村の良さはかなり強調される東京から迎えた講師先生のお話にて、座が白けてしまうこともある。都会育ちの亭主と憧れの都会に嫁いだ女房との間で、農村への住居移転をめぐる夫婦喧嘩も起こる。

各地で流行の「ふるさと交流事業」でもそう。モノとカネとヒトの交流で、さらに人間相互のココロの交流を通じて、都市と農村の連帯を深めてゆくことは確かに結構なことだ。都市側も農村側もそう思っている。だが、その実践の過程ではいろいろ微妙な問題が生ずる。

東北は下北半島のある小さな漁村を訪ねた東京の生協組合員の主婦たちが、美しい海とおいしい魚と村の人々の厚い人情をほめ称える。余りのほめ言葉に、厳しい冬季間の生活や魚をとることの苦勞も知らないで、地元の人々はいよいよ思いたくなる。

中国山地のある村では、年末も迫る頃、ある都市に餅搗きに出る年中行事の交流をしている。都市の人々には喜ばれるが、村民にとっては、仕事の都合などで毎年出かけることがおっくうになり、交流事業のマンネリ化に不満の声があがってくる。

総じて、農村側はカネのための交流になり、



都市側はココロの交流を求める。ともに、不足しているものへの期待が大きいため、スレ違いだろう。そんな交流のなかで、都市側に対する農村側の一種の劣等感や、農村側への都市側の身勝手さや優越感が、つい顔を出してしまう場面がある。

### 都市が農村を変える

それにしても、都市からの諸要求や諸情報を通じて、好むと好まざるにかかわらず、農村が変わってゆくことは確かだ。都市が「悪」の場所だと伝統的に思われている欧米でもそうだが、日本では一層その傾向が強い。世界に誇る急速な経済成長のもとに、都市が発展し、農村が大きく変わった。

過疎地域に指定されている市町村の面積は全国合計で国土の四六%を占めているが、そこで定住している者は全人口の六%にすぎない。過密と過疎の対照性を象徴している数字だが、多くの過疎農村では、経済発展に伴う地すべりの人口減少の後始末をどうするかで、四苦八苦の状態が久しく続いている。都市でふるさと産品が喜ばれるといつてはそれを手がけ、都市の人々のための遊び場づくりも試みる。バブル経済のなかで大型リゾート開発ブームに飛びつき、各地の農村がそれに踊らされたものの、それが忽ちはじけてしまったのはつい先日のことだ。

農村を強引に変える力が都市から押し寄せられる。農村を食い物にする都市からの情報には、農村はもうこりこりだ。そう思いながらも、圧倒的多数の人口を抱えている都市からの新しい要求と情報を農村は捜し求めている。正確で頼りになる情報が欲しいのだ。都市からの情報発信が、これからの農村をさらに大きく変えてゆくだろう。

### 都市と農村の新時代

大都市がそろそろゆき詰まり、その破局が近いように思われる。過密ゆえのゆき詰まりだけではない。一九世紀以来の大きな歴史的転換点としての破局である。

大都市の人々は、人間性を回復する場をどうしても農村に頼らざるをえない。それはかなり以前からのことだが、そのうえに構造的な都市の破局問題が迫っている。これまでの二世紀間を駆け抜けてきた世の中のいわゆる「近代的発展」が、資源の極度な浪費、ひいては地球規模での深刻化をひきおこしている。

人類の歴史が終末状態にたち至っているのだ。そんな警鐘をならす学者たちが最近多くなった。

そんな現在の歴史的終末状態をくぐり抜けるために、人類にとっての未知への挑戦が必要になっている。都市と農村の新しい提携と連帯のもとに、それも全世界にまたがる国際的な関連のなかで、この局面を通過する以外に方法はないだろう。都市と農村にとっての新しい時代の到来である。

この新しい時代の幕開けに対処するために、新しい知恵と勇敢な実践が、いま切実に求められている。世の中のそんな大きな流れのなかで、われわれ庶民ができることは一体何なのか。そんな観点から、改めて都市と農村の今後のあるべき方向が考えられなければならないだろう。

■自然・大地からの提案

# ブナの林へ、おらぶどの生命

白神山地に生きる — 鎌田孝一



◆里は初夏、岳岱は春。芽吹き時のブナ林はとくに美しい。



白神山地のニホンサル(2月)



◆生存があやふまれているクマゲラ。  
◆藤駒湿原の初夏。



白神岳と秋田・青森の森林生態系保護地域。左上方が県境の峰。

(写真はすべて鎌田孝一氏)

ブナの林こ おらどの宝だ  
芽こ萌える頃 ブナの林さ入れば  
お天と様の光の中で  
まるで 金の小判がつかつてるように  
にやあ……きれいなもだ  
それ見れば 目さめる思えだ

ブナの林こさ入って  
あっちの沢こ こっちの沢こ  
どこさ行っても山菜だば  
何ぼ種類も取ったもだ  
どの沢この水飲んでも  
砂糖水こ飲むえたもだ  
今だば よっぽどのどこでねば  
安心して飲まれね

夏の暑どき ブナの木こさ寄って休むど  
ブナの木子 しやべるず  
ようぐ聞ける 昔の仲間の話  
すんまそばで 切り倒された  
その仲間の泣ぐ声  
けものだちの けんかの話  
雷 ごほほって(どなりちらして)



紅葉するブナ林。

ブナの木さ やづ当りした話  
枝ゆすってな……淋しそうにな……  
三百年もの 長え話もあるべ

ブナの林こ 生命の林こだ

大きなけものも 鳥こだちも

この林こあれば 安心だ

ブナの実こ ちつちえばつて

けものだちの生命の実だ

その岳山たけやまのブナの林こ

なんだもだば この切り様！

山のごと ころくた判るもさねで！

めったやたらと 皆伐てらだどて（と

かいつて）

けものも住めね山にして！

水のごども 田作る人のごども

山くずれたの 水害のごども

地形もなも考えねで

てら一面 ぶつた切つてしまだ

ブナの林こ 恵みの林こだ

秋になんば大きなマイダケ、トビダケ

カノガ（ブナハリタケ）、サモダシだの

何ぼ種類あつべがな……

岳山 変わったのだ

岳山 殺せばだめだ……

山殺せば けものも人もだめになる

ブナの林こ おらどの生命だ（一部中略）



鎌田孝一氏

### ●ブナ林の素晴らしさをまず住民に

私は父が鉱山で働いていた関係で、小さい頃から主として東北の鉱山のある町や村を転々とした。鉱山は大抵山間部にあるので、坑口周辺にはブナやナラなどの美しい森があった。私も戦後、適当な就職先もないので鉱夫として働いた時期がある。仕事を終えて地底から出てきた時、その緑の美しさとはばゆい太陽がどれほど安らぎと感動を与えてくれたことか。

休日には仲間を誘ってブナ林へ行き、野草や小鳥たちの声の中で過ごすことが多かった。

あれは昭和24年の夏、19歳の時、私を含めて三人の仲間と朝8時に発って白神山山駒ヶ岳に向った。途中岳岳を経由し、藤駒湿原に到着した。まだ道らしいものがなく何度か迷いながらの行動で、3時に着いた。湿原の中ほどにブナ、ミズナラ、ヤチダモの生えている乾いた所があり、そこにテントを張って泊まり、朝を迎えた。その時見た幻想的な世界は、いまでも忘れることができない。

霧の中で耳を澄ますとブナ林の中から、しったり落ちるしずくの音が聞こえる。霧が晴れてくるにしたがい、昨日は気づかなかった植物が美しい花を咲かせている。小鳥たちが一斉に鳴き出し、樹を

たたく音がする。この美しい森の、せめて花の名前位知りたいと、後年カメラにおさめ、植物を調べる契機となった。

その後、別の鉱山へ行ったり、一般企業に勤めたこともあったが、白神山麓のある藤琴（現藤里町）での何年かが忘れがたく、友達のおすすめで、藤里町に写真店を開設した。

昭和37年、町に観光協会が設立されることになり、その前にと商工会の主催で駒ヶ岳（1158m）へ初の団体登山を行った。学生から老人まで50名が参加、車で21キロ、藤駒川の上流、白石沢と黒石沢が合流する地点で降りて、徒歩4時間。岩塊あり、湿原あり、沢ありのきつい道程だったが、頂上に立った時は誰も汗を拭くのも忘れて立ちつくした。

360度の大パノラマ。西には二ツ森と青森県境の稜線、その奥に白神岳の峯々が横わり、北には岩木山、その右方は八甲田連峰。八幡平、岩手山、森吉山もみえる。山々の峯が折り重なるようなそのうねりは大半がブナの樹海で、ひとときわ緑が水々しい。

一人の老人が「まさに幽境の地だ」と言っていたため息をついたものである。

以来毎年10月10日を登山日と決め、観光協会の主催で団体登山が継続されている。

県立自然公園指定の問題が持ち上ったのは昭和38年だったが、私の気に入りの太良峡や不動溪谷が入っていない。早速カメラに撮ってカラープリントに仕上げて関係方面へ持っていく。大抵の人が「こんな素晴らしい景勝地があったのか」と驚き、機会をみてその場所へ案内する。白神の水先案内人が私の役目に

もなっていた。

太良峡も公園区内に設定され、私は心の中で万歳を連呼したものである。

### ●「秋田自然を守る少年団」の結成

森林伐採は戦前から行われていたが、戦後は皆伐方式が全国規模で進んだ。全国どこにもあったブナはその大半が伐採され、田畑や宅地、杉、ヒノキの人口林に代わった。

藤里町の場合も、ブナを中心とした広葉樹は70%が消滅し、急傾斜地帯や林道のない奥地にかろうじて残ったにすぎない。

クルマの普及でさらに奥地へ入っていく林道。このままでは私の大切な湿原や老木たちも失われていく。

「何とかせねば」。山岳会のようなものを作るべか。「秋田自然を守る友の会はどうだ」と、小森君という山仲間と私が発起人になって会を発足。設立総会には営林署員、役場職員、学校の先生ら13名が集った。少数ではあったが、山歩きが好きな人で、植物調査やクリーンアップ活動、樹木名表示板の取付け、自然観察会の開催等、地味な活動を続けた。

それから2年後の昭和50年、「秋田自然を守る少年団」を組織した。海には海洋少年団、陸にはボーイスカウトなどがある。90%が山岳地帯の藤里町には山岳少年団があってもいいのでは。自然を守る友の会も大賛成、町内4小学校の校長も大賛成してくれた。

団員は小学校5、6年生を対象に50名、50名に限定したのは理由があった。身近な自然を歩くこともあれば10数キロ離れた自然公園



白神・駒ヶ岳へ登山する秋田自然を守る少年団

内の沢を探索することもある。事故のないよう適切な人員を配する必要がある。

以来「秋田自然を守る少年団」(A・N・G)は毎年新たな少年少女が入団し、現在までに約800名が卒業していった。兄から妹、弟へと引き継がれている。

結団式の時、私は「藤里には秋田県を代表するすばらしい自然がある。この自然を守っていく役目が秋田N・G少年団です。木や草の命を知り、自然の変化や決まりを学び、自然と人間のかかわりを判るような人になってほしい。この自然を守っていく役目を勇気をもってやっていきましょう」と話す。

少年団の活動の様子は、町広報やNHKニュースなどでも取り上げられて、子供たちに大きな夢と誇りを持たせることにもなった。

7月の駒ヶ岳登山、秋の自然公園内の観察会とクリーンアップ活動、そのあとキリタン求会をふるさと公園で行う。

結成当時の子供たちはすでに成人して社会人になっている。少年少女時代のこの体験が生かされているかは判らないが、どこかできつと役立っているだろうと私は信じている。

### ●「自然って遠いんだなあ」

自然を守る少年団の7月の観察会は雨や霧

のために途中から引き返すことが多い。町から登山口の権岱山までの1時間15分は、ほとんど人口林で、登山コースに入ってからブナの原生林になる。約2時間歩いて駒ヶ岳の山頂に立った子供達の喜びは格別である。その時、

「自然って遠いんだなあ…」

といった子供のつぶやきが、私や友の会の会員の心をゆさぶった。いまま決して忘れることのできない言葉である。

藤里町管内の白神山地からも約60%のブナ原生林が姿を消していた。頂上から眺めると伐採跡が点々と目につく。そうした状況を子供心に写し取った素直な発言だったのだろう。

登山口あたりに戻ると、空カン、ビニールなどが散乱していて、ゴミを集めると小型トラックに満杯になる時もある。子供たちの心に大人に対する不信感を抱かせなければいけがと心配になることもよくあった。

「美しい心で、美しい自然を守りましょう」と少年団が設置した標識の場所はきれいだ

が、他の場所にゴミがあることが不快だった。ブナが一人前になるには少なくとも1000年以上かかる。二次林の育成も必要なので、少年団も参加してブナの植林もはじめたいと思っている。

「ブナの林こ、おらどの命だ。ブナの林こねぐなれば水も枯れるし、大雨になれば苦余るでは…」

柏毛川流域の農家の老人の言葉である。

ブナの落葉は一ヘクター12・8トンから3トンあり、岳岱には15〜20cmの腐葉土が形

成されている。雨はブナの幹を伝って地面に吸収され、豪雨になっても決して川は濁ったり洪水になることはない。陽ざしは地面までふりそそぐので沢山の植物が共棲できる。自然のメカニズムの素晴らしさに感心するばかりだ。

昭和60年代に入ると、「青秋林道」計画に対して白神山地のブナ原生林を守れという声が各方面から上がりはじめ、国会でも取り上げられ、そして昨年、白神は世界でも貴重なブナの原生林として環境庁が保全地区の指定を約束した。

まだまだ問題は山積しているが、白神山地のブナ原生林(1万6000ヘクター)はとりあえず保全されることになった。昨年東北を襲った台風で、植樹した杉は各地で倒れ、いまま茶色い山肌をさらしているが、ブナの森たちの樹々は風雨にも耐え、何時ものように豊かな春の芽吹きをみせてくれた。今年は沢山の花がついたから、秋は木の実が豊作になるだろう。そうなれば熊やサルが人里に出て、被害を与えたり、殺される等の事故に会うこともない。

白神は国土の何千、何万分の1の小さな森だが、ブナは日本が誇る豊かな自然の貯蔵庫。すべての生き物の森として、これからもしっかり守っていかねばと思っている。

●かまたこういち氏/カメラマン。秋田県自然保護指導員、白神山地のブナ原生林を守る会理事長他。藤里町で写真館経営。著書に「白神山地に生きる」(白水社刊)他。61年に第20回吉川英治文化賞受賞。





かつて、ちりめんの絹を運ぶ荷馬車  
でにぎわい、戦後はいち早く近代的な  
織機を導入して町中に機おりの音が轟  
いていたという但東町。華やかなりし  
時代の面影はなくなつたが、旧京街道、  
宮津街道を「但東シルクロード」と名づ  
けて、町おこしがはじまつた。



ふれあいセンター「やまびこ」

# 但東シルクロードはふれあいロード 「やまびこ」を拠点に国際交流も

「やまびこ」がおもてなし

JR山陰線豊田駅からバスで出石ま  
で行き、そこからタクシーで但東町の  
「やまびこ」センターへ。都合で到着  
が夜になり、何となく不安だったが、  
緊張感の間もなく消えた。

「20年ほど前までは、どの家も夜遅く  
まで電気を明々とつけて機織機はたおちの音が  
してたねえ。絹はだめになつたけど、  
いまはシルクロードのまちって言われ  
て、結構人気があるようだね。明日は  
おいしいそばを食べてみてくださいよ」  
初老の運転手は、但東町の出身でも  
住民でもないのだが、盛んに但東町の  
PRをする。

やがて闇の中にまばゆく輝やく建物  
が見えてきた。町の交流事業の拠点、  
ふれあいセンター「やまびこ」である。  
夜8時近くになっていたが、和装の  
女性たちがにこやかに出迎えてくれた。  
通された部屋は、ゆったりとしたテー  
ブルやソファのある広々としたツイン  
ルーム。一人には贅沢すぎると思える  
のだが、この部屋は夏には青少年の林  
間学校に使われるので、二段ベッドの

部屋に変身するのだという。

夕食は、山菜や日本海の幸をたっぷ  
り盛った会席料理で、またまた感激。  
コック長は東京からUターンした腕き  
きの板前さんとかで、都会でも滅多に  
味わえない料理を「やまびこ」でとて  
も安く味わえることになった。(1泊2  
食付7000円前後)

風呂は24時間OK。センターの裏手  
の山はフィールドゴルフ場(ゴルフと  
ゲートボールをミックスしたゲーム)、  
横はグラウンドと雨天もプレイできる  
ゲートボール場。そして目の前の水田  
や畑は、農家の協力でイチゴ、野菜、  
さつまいもなどの体験農園になる。

宿泊客の中には、神戸から年一、三  
回やってくるという会社の若者、中年  
グループがいた。

「フィールドゴルフとジョギングでた  
っぷり汗をかいて、風呂に何度も入っ  
て、そのあとはうまい料理に舌づつみ。  
応待もていねいで、こんなにいいとこ  
ろ他にありません」

神戸からクルマで2時間。ドライブ  
コースとしてもいいし手づくりの土産  
品もなかなかいける、と口をそろえて

ベタぼめて  
ある。

「やまびこ」  
は昭和60年  
に国道42  
6号線沿い  
の丘陵地に  
オープンし  
た。多目的ホールや研修室もあり、会  
議の場にもなる。

一階ロビーの展示・売店コーナーで



フィールドゴルフ場





は「一区一品」運動から生まれた素材な手づくり土産品が売られている。バラジャム、赤花そば、卵油など、主婦のアイデアから生まれていまでは但東のブランド品になったものもある。和紙人形入りののはし袋、ちりめんを使った小物入れなどは、お年寄りたちが時間をかけて作ったまごころの商品といえそう。これらはシルクロード会員(850世帯)に年2回ふるさと便として送られてもいる。「やまびこ」の年間利用者は宿泊、休憩を入れて年間3万人を超える。

### 伝統産業、ちりめんの実演、 展示場「しろやま」

但東町は、但馬地方のほぼ中央部に位置し、天の橋立のある丹後や福知山・京都へも近い。そのため昔から丹後ちりめんや京都呉服との結びつきが強く、高級絹織物の里として町の経済を支えてきた。

昭和48年のオイルショックまでは、年商100億を超えることもあった。

「1700軒の農家の1/3は機械りをしていましたが、48年をピークにバタバタとやめていきました。まだおばあちゃんや奥さんで続けていきたいという家も機械を廃棄しないと助成金が受けられないということもあってやむなくやめた家もありました。でも今でも、3割、約220軒が続いています。

組合を作って近代的な工場やっていた地区も多く、個人ではお母さんが頑張っています」

役場総務課山下文生主査から説明を聞きながら、但馬ちりめん振興館「しろやま」へ向った。

絹織物の作られる過程と絹の美しさや風合いのすばらしさを広く知ってもらおうと昭和63年にオープンしたのも。実演・展示・試着コーナー・喫茶・レストランがあり、但東シルクロードのドライブイン的役割も担っている。

「しろやま」の機織り実演には、中山地区の主婦たちが交代でボランティアで参加している。

なお目の前には、東経135度、北緯35・30度が交わる子午線の町として「子午線塔」が立っており、ドライバーが足を止めていく。

### 人と文化との新しい出会い モンゴルの研修生を受け入れて

シルクロードは経済と文化と人が行きかう道である。このロードに関心を持ってやってきた人達がいて、そこから未来へ向けての新しい道が生まれようとしている。

やってきたのは大阪外国語大学小貫雅男教授とモンゴル学科の遊牧地域研究グループ。三方を山に囲まれた自然郷但東に関心を持ち農村調査に入り、モンゴル遊牧民と対比しようというも



但馬ちりめん振興館「しろやま」



「そばの郷」

のだった。以来大阪外語大の先生方とのつき合いがはじまり、モンゴルとの交流へと発展していった。但東からは本田重美さん(赤花そばの郷生活組合長、会社経営)がモンゴルへ行き、モンゴルからも代表団が来日。そして昨年4月本田さんが受皿になって三人の若者が研修生としてやってきた。

ビリツクさんの27歳は技術者だが、あとの二人は18歳、20歳で全くの遊牧民。言葉も判らない、生活も文化も全く違うという状況で来町したが、心があれば何とか通じ合うもの。すっきり日本語で日常会話ができるように、「日本はとてもすばらしい」「みんなとても親切でやさしい」と語る。

本田さんの会社の寮に入り、技術者としての基礎学習を学んだ。間もなく帰国する予定なので、職場の同僚たちが家に招いたり、海釣りに連れていったりしてサービスしている。

三人を海釣りに招待することになり、手づくりのお弁当づくりに腕をふるった坂本笑子さんは、「ビリツクさんたちの帰国は息子たちと別れるようでも淋しくなります。

私たちの方がモンゴルの人達からいろいろのものを学びました。ありがたうといたいですね」としんみり語っていた。

来年は、また新たに3人のモンゴル青年がやってくる。そして平成6年には、モンゴルの砂漠と但馬を結ぶ「21



坂本さん(右から3人目)とモンゴルの若者たち。

世紀の村おこしを考える国際シンポジウム」が但東町他で開催されることになっていく。  
 「町おこしには施設や行事も大切ですが、一番大切なものは人ですね。いろいろの人が訪ねてくれ、ふれあいの中からまた新しいアイデアや活動が生まれてきています」  
 と山下主査は言う。  
 昨年町内に養護老人ホーム(在宅サ

ービス、ショートステイも併設)が開設したが、同ホームの施設長は町外の人で、やはり但東町が気に入ってやってきた一人だった。

こういうことも、福田町長をはじめ高木やまびこ所長、休日も返上して夜おそくまでガイド役をしてくれた山下さんらの意欲的でしなやかな対応、住民のふるさとを愛し誠実に生きるという姿勢があるからだと思う。

### 通も注目の「赤花そば」

それを特に感じさせてくれたのが、前述した本田さんだった。本田さん手づくりの自慢の日本そばをぜひ食べてみたいと「そばの郷」を訪ねてみた。

赤花地区では昔から、お客様をもてなす時は自家製のそば粉を打って出すという習慣があり、どこにも負けない最高にうまいそばを食べてもらいたいと開設されたのが「そばの郷」。

現在のところ、本田さんが会社を休める日と、そばの生産量に見合った調理数ということから土・日曜日だけ開館している。

そば作りに参加し、手打ちの業とそばのおいしさを味わってもらおうというもので予約制。

本田さんは朝6時起きして、低温保存してあったソバの実を精粉する作業からはじめる。地元での有機栽培で採れた一〇〇%純正のそば。つなぎの粉



手打ちそばを作る本田さんと「そばの郷」内部

は一切使わない。しかも客が食べる時間に応じて打ち上げたものだけに、大変おいしい。

かおりがあつて、しつとりとして、歯ごたえ抜群で、普通食べる日本そばとは大違い。評判を聞いて遠くからやってくる通も多い。

そば畑を4町歩まで広げて生産量の増大をはかっているが、まだまだ足りず、一日60食分と限定している。

「国産そばなら赤花地区以外のものでもいいのでは」という意見もあります。その日の気温や湿度にも影響する生き物なんですから」と本田さんは言う。  
 昼近くになると、本田さんの会社で



働いているというお母さんやお年寄りも手伝いにやってきた。

みんな働きの者、しかも生き生きしている。

そういえば、但東町は男性の平均寿命が76・2歳で県下1位、女性は81・4歳で2位という長寿の町でもある。

「年寄りがよう頑張っています。でもこれからは若い者もつと精を出して野良仕事も機織りもバトンタッチしていかんと。そのためには農民が所得倍増になる世の中にならなきゃダメだと思えます」

と言った本田さんの言葉が、いつまでも心に残った。

# 私たちは、こんなふるさと リゾートが欲しかった。

## ●アルムワールの発足



しいたけの原木づくり。作業のあとはもちつき大会を（望月町）

都会にはいま、「田舎大好き人間」が増えている。それなのに、全国各地のリゾート開発はなぜか都会志向型ばかりが目につく。もっと心身ともに寛げような、ふだん着姿のリゾート構想がないのだろうか。と、思っていたら、「今あるものを活かす」というユニークな視点に立った「ふるさとリゾート」がスタートしたという。その名も「ア

ルムワール」。仏語で「衣装ダンス」という意味をもつその名の由来は「田舎に心の衣装ダンスをもちましよう」ということからつけられたらしい。何だか面白そうだ。

「今あるものを活かす」のが基本

「アルムワール」が発足したのは平成4年5月。このリゾート事業は新潟県

安塚町、長野県望月町、長野県武石町、山梨県豊富村、群馬県下仁田町の4県5町村が一つの単位となって、共同で取り組むことから始まった。

自治体同士が県を越えて交流しあう事例は、いくつもあったが、同一の経済事業を4県5町村以上で全国的に行おうという事例は、これが初めて。田舎の豊かな自然の中で、人や文化とふれあいながら、都会と田舎に住む人たちが互いにより心豊かに生きていく、そのための「心のふるさと」をもちませんか、というのがこのふるさとリゾート「アルムワール」の主旨である。

その大きな特長は従来の大規模施設型リゾートに比べ、地元の人とのふれあいがあることや、廃校や使われていない田んぼの利用など今あるものを活かすため、費用が安いという点だ。これは利用する側にとっては見逃せないメリットであろう。

利用者はすべて「家族町村民」か、「法人町村民」という名の会員となり、登録料と年間の町村民会費を払いこむ。「家族町村民」、「法人町村民」それぞれにA・Bの2タイプがあり、ちなみに「家族町村民」のAタイプは1回の利用人員が5名まで。登録料は50、000円、年会費は95、000円となる。Bタイプは2名で、登録料30、000円、年会費57、000円と設定されている。

発足記念式典で挨拶をする宮島さん。



「町村民」になると、5町村すべてを「自分のふるさと」として楽しむことができる。

具体的には拠点施設（一泊2、000円位）の利用や町村の伝統的祭りへの参加、さらには専用の「衣装ダンス」が利用でき、現地で気軽に遊べるよう衣類や道具、レコードや本などを収納することができるという。また、田植えや収穫などに参加するイベント「遊樂農園」や、5町村からの年5回の特産品の送付など、盛りだくさんの楽しみが用意されている。

## 陰の仕掛人は東京にいた

このふるさとリゾート「アルムワール」構想を企画したのは、「アルムワール推進協議会」の事務局長宮島茂さんだ。宮島さんは東京生まれ、東京暮らし。「田舎のことは何も知らなかった」というれっきとした東京人だ。

もともと運送業にかかわっていたことから運輸省の「フレイトビラ」（荷物の別荘）に着目。過疎地の廃屋やJＲ貨物の空地などを都会の人の荷物倉庫に利用しようという構想にヒントを得て、「アルムワール」構想がふくらんでいったという。

「心の衣装ダンス」とは、「そこに行けばいつでも温かな人間同士のふれあいや、作りものでない豊かな自然がある、そんな心のゆとりのようなもの」と宮島さんはいふ。

その「アルムワール」の発足記念式典と第一回「遊楽農園」イベントが5月に新潟県安塚町で行われた。東京、千葉、神奈川から47名の会員が参加。本格的な田植えや郷土料理の味を楽しんだ。

参加者たちの声は「親戚みたいだからわずらわしさがなく気軽にいける」「自然の中にと心まで素直になれる。東京で疲れた時、農家のおじいちゃんやんの『リフレッシュしにおいて』と書いてくれた言葉を思い出す」畑の種

まきが一番楽しかった」などなど、大好評のスタートとなったようだ。

これは同時に町村側にとっても大きなメリットを含んでいる。料金システムが地元地域に優先的にプラスとなるよう設定されている他、今あるものを活かすため、自然環境を破壊することがない。一町村ではできないイベントや研究開発などができる。農村の後継者問題などもより広い視野で検討していける、などの点だ。

宮島さんはいふ。「田舎に暮らす人も都会に暮らす人



下仁田町での「遊楽農園」体験。

も、生活環境やライフスタイルこそ違え、同じ人間同士ですよ。当たり前前ですけどその処を大事にしたいと考えています。驕るのでもなくおもねるのでもない対等な人間と人間としてのつき合い。「アルムワール」のふるさとづくりは都市と農村の対等交流が基本です。ですから運営も評価の基準もすべて双方から。本当にわかりやすいシステムなんです」

対等交流という、当たり前のよういて実は多くの人が見落としていたこの視点こそ、農村と都会との本当の意

味、人間的な交流の原点なのではないだろうか。

5年間に及ぶ試行錯誤や実験事業を経て、ふるさとリゾート「アルムワール」号は走り出した。毎年10町村単位でふるさとリゾート村を増やしていく、将来は全国約350町村に拠点を開設し、年間1千万人の利用者をめざすという。

●「アルムワール」への問い合わせは、アルムワール推進協議会

〒150東京都渋谷区広尾5の9の12  
☎03(3449)0936まで



農家の人と一緒に田植作業（武石町で）



「ハーベスト・ワーフ」の建物。右が建築中の日棟。

## 都市と農村の “人・物・情報”交流の場 「ふるさと往来センター」オープン (多摩ニュータウン)

“人・物・情報”のネットワークをはかっていることと、常設のアンテナショップとして機能していくことになった。センターでは、熱意ある「ふるさと会員」を募集中だ。

### 全国3245市町村の出身者が 暮らす街

20年前に多摩丘陵に出現した21世紀型住宅都市、多摩ニュータウン。多摩市を中心に、八王子市、町田市、稲城市にまたがる3000ヘクタール、計画人口30万9000人の我が国最大の規模を持つ団地だ。

従来の団地に比べて広々とした間取り、地域ごとに特色ある個性的な街づくり、電柱がなく緑地の多い快適な環境。加えて、教育文化施設、商業・業務施設も年々充実し、調和のとれた一つの都市を形成している。

団地周辺には都立大学、大妻女子短期大学、多摩大学も進出、企業やホテル、レジャー施設（サンリオ・ピュロランド）と目白押しだ。

入居者の平均年収は700万円、高学歴者が多いということから、恰好のマーケティングの対象地になっている。団塊の世代とそのファミリーのライフスタイルを知る上でも話題になるところである。

しかし、この入居者の大半は地方

出身者。多摩市の調査では、人口14万4000人のうち旧住民は約2000人で、ほとんどが新住民。出身地は全国3245市町村のすべてといっているほどで、多摩ニュータウンで日本地図が作れるという。

「ふるさとからの産品を宅配しよう」と、4年前に着想した「ふるさと往来クラブ」の代表幹事古川猛さんは、

「地方のすぐれた人材をことごとく吸収してきたのが都会。その人たちが顕著に集ったのが多摩ニュータウンです。彼らはトカゲのシッポのように、切っても絶えず故郷を背負いながら暮らしています。」

いまようやく子育てや企業戦士としてのあわただしい生活から解放されはじめ、余暇の増大と相まって、ふるさとやカントリーライフへの関心が高まってきました。そのせいか、私たちの農村と交流しよう」という呼びかけに、凄く反響でした」と語る。

### 好評を博してきた

### 農村との交流フェスティバル

「ふるさと往来センター」設置に至るには、4年間の活動の経過があった。その主な歩みをみてみよう。

タウン誌、多摩新聞社（月刊「TAMAGUIDE」発行/10万部無料配布）が創業一周年事業として行ったのが、

木のぬくもりと杉のかおりが心地よい巨大なログハウスが2棟。背景に機能的なマンモス団地や大学、企業の近代的な建造物が控えているだけに、このログハウスは人目をひく。

東京のトレンドイナ先端都市、多摩ニュータウンのほぼ中央部分にオープンした、「ふるさと往来センター」の「ハーベスト・ワーフ」（収穫の湾という意味）という名前の建物で、農村と都市との交流をめざす施設。

年数回のイベントや研究会だけでなく、都市と農村の新しくてより親密な

兵庫県黒田庄農協の協力で行った神戸ビーフの宅配だった。主婦たちに好評を博し、「新鮮でおいしいものを食べた」「生産者と交流したい」という声が数多く寄せられ、「ふるさと往来」活動がはじまった。

その頃、多摩市には新しい地域コミュニティや文化活動を推進しようと生活文化部文化事業課という新しい部課が誕生、古川さんらの活動に注目した。多摩市が主催、農林水産省も協賛して行われたのが、平成元年11月3日～5日の「第一回いきいきTAMAMふれあいフェスティバル」。黒田庄の牛2頭をはじめ11市町が参加してふるさと産品の展示即売会を行い、子供たちは牛にさわったり背中に乗ったりで大喜びだった。

翌年のフェスティバルには、会場を公園からメイン通りに移し、そこに「ふるさとストリート」を設け、さらに新しい市町村が加わって産直品の即売やPR活動を行ない、連日20万人という人出で賑った。

これらのフェスティバルが契機となって、農村と交流するための研究や農産物に関する都市生活者のニーズ調査、農村リーダーとの会合などが数多く持たれるようになり、活動の拠点となる施設を作ろうという方向へと高まっていた。

古川さんは、

「ふるさと産品の宅配だけでは真の交流にならない。私たちは、過疎化や高齢化に悩む農村の村おこしにもかかわっていききたいし、将来は中国やアジアの農村とも交流していきたくと思っています。それを生み出す労力や人材の育成、マーケティングやFAXやパソコンを活用した情報交換をめざしていきます」と語る。

古川さんは東方通信社の社長で、同センター事務局長の高橋さん達もみな新聞記者。都市と農村の新しい交流を通じて、農村が元気になればと願っている。

一方、多摩市は「第三次多摩市総合計画」に「みずみずしい創意あふれる都市」づくりの基本構想に「ふるさと往来センターでの活動やイベントを支援していく」ことを位置づけ、昨年来の議会で一千万円のふるさと交流事業費を提案、可決された。

これは唐木田地区に4900平方メートルを都市整備公園より借地するための費用。センターの建設や運営には、会員の会費や企業、団体等の協賛金などで充てていく。

### ふるさと産品や情報の常設館に

ふるさと往来センターのログハウス「ハーベスト・ワーフ」が開設された場所は、新宿から小田急線、京王線で30分の唐木田駅徒歩1分の場所。

唐木田地区は、平成7年のニュータウン完成時には、多摩ニュータウンのほぼ中心部になる地区で、近くには大妻女子短期大学、都立大学、大手企業の営業所などがある。

住民だけでなく、学生や会社関係の人々も利用できることで、センターの活動に幅が出てくるものと期待されている。

施設は、将来的には4棟できる予定だが、当面は2棟を開設し、活動を充実していく。

すでに昨年11月に開所しているA棟は、一階に三菱自動車販売が入り、二階をふるさと往来センターが使用している。

このログハウスは、平成2年4月～10月に神奈川県湘南海岸で開催された「サーフ90」の際に藤沢市に建設されたログハウスを閉会后移築したものの。三菱自動車とタイアップして昨年5月に、都市と農村交流オートキャンプ・フェスティバルを開催したところ、応募者が多く参加者をしぼるのに苦労した一幕もある。

今年7月に新築したB棟は、一階が「手づくり食・工芸館」、二階が「情報・テーマ館」になる予定で、常設のふるさと産品の展示販売ショップを設置する他、これらの食品を使ったレストハウスやクッキング教室なども計画されている。

オートキャンプ・フェスティバルの呼びかけに集まった人々



ふるさと往来センターの活動を資金面でも援助する多摩市では、センター

の機能について次のように述べている。

①全国のふるさとの情報の受・発信拠点となる。

②人と人との交流を通じて人づくりの場にする。

③まちづくり、ふるさとづくりのフォーラム開催とまちづくりの研究の場とする。

④ふるさと芸能、文化、産品の交流をメインにした新しい文化創造の場にする。

具体的な活動方針は、

・各市町村の広報誌、団体等のPR誌、タウン誌、地方新聞などの資料を展示、公開する。

・「ふるさと往来ニュース」の発行(主としてFAX等を使いスピーディに)

・ふるさと産品の展示販売

・ふるさと産品を使ったレストハウス経営や、3分クッキング教室等の開催

・ふるさと芸能、イベントの開催

・まち、ふるさとづくりフォーラム、研究会の開催

・フリーマーケット、朝市等の実施

・ふるさとツアーの実施

日常的な運営業務は、多摩新聞社と専門家、関係団体、市民グループの代表者たちで行っていくが、しはらくはボランティア活動になりそう。

後援および協賛には、農林水産省

各地区の農協、林野庁、全国自然休養村協議会(財)21世紀村づくり塾の他に、企業も数社名を連ねている。官・公・民一体となった新しいジョイント・プロジェクトで、近いうちに法人組織になるものと思われる。



### ふるさと会員を募集中!

「この会の活動が成功していくためには、全国各地の市区町村や関係団体の参加が絶対条件になります。必要であれば、各地へ説明等にも出かけていく覚悟です」と語るのは多摩市生活文化部の古閑洋一課長。このセンター建設計画を策定するに当たり、各地へ足しげく出かけ、農村の現状や、農村と都市の交流のあり方をいろいろ学んだという。できれば3245市町村のすべてが会員になってほしいと望んでいる。さて、その会員だが、一般会員は都

市側住民で、入会金も会費も無料。現在までにすでに6000人が登録しており、今後は1万人にも2万人にもなると予想されている。

ふるさと会員(ふるさとの団体、法人等で、都市側に情報を送りたい人)の場合は、入会金が3万円、月会費3000円、都市や農村問題等にかかわる団体、法人の場合は、入会金2万円に月会費2000円。その他に、特別会員、カタログ会員制度などがある。

会員には会員証が交付され、交付代として一般会員1000円、(一枚で家族みんなが使える)、ふるさと会員3000円が必要。

テレビ電話やFAXを使って家庭にいながら欲しい情報が得られるというパソコン通信も計画中で、会員相互の情報交換もスピーディに適確に行われることになりそうである。

「ふるさと会員の方に特にお願いしたいのは、企画運営していくのは私たちではなく、みなさん自身であるということ。どんどんいろいろなアイデアや情報を提供していただき、センターを思い切り活用してほしいと思います。熱意ある会員を募っています」という事務局佐藤朋彦さんの言葉を最後に掲げておく。

●問い合わせ(事務所)／〒101東京都千代田区神田神保町3-13-8神三ビル4階 ☎03(3262)0735

## 田舎暮らしの本 熱い反響



月刊『田舎暮らしの本』に全国から大反響!

昨年まで季刊で発行してきた「田舎暮らしの本(JICC出版)が月刊化し、順調な伸びを示している。読者に人気の記事は、地方の不動産情報やカントリーライフをしている人々の実例紹介など。

だが、最近では田舎で暮らしたいという若い女性や、今まで発言することのなかった農業青年達の投稿も多くなり、読者の幅が広がっている。同誌が年4回開催している「田舎暮らしのセミナー」には約200人が参加、老後を田舎でという熱心な夫婦の姿が多くなっている。地方発の各種情報を受付中。

問い合わせ/田舎暮らしの本編集部 ☎03(3234)3917

### 書店が「ふるさと」講座

横浜市をはじめ神奈川県下で最も大きな書店、(株)有隣堂の生涯学習センターでは「田舎暮らし・アウトドア講座」を開催、年数回各地を訪ねて地方の人と交流したり体験するツアーを行っている。

今秋は炭焼き体験(長野県、ロケハウスを自分で建てる(群馬県)などを計画。

問い合わせ/有隣堂・生涯学習センター ☎045(261)1337





# INFORMATION

## 和歌山県ふるさとふれあいフェア 紀州の山村大資源博

豊富な山村資源を持つ和歌山県。緑豊かな森林、古い歴史と文化、温かい人情——これらの資源や特性を見直し、今後の山村振興にいかしていくことをめざして「紀州の山村大資源博」が10月24日(土)、25日(日)の2日間、伊都郡花園村で開催される。

主催は和歌山県内の33市町村で構成される「ふるさとふれあいフェア実行連絡協議会」。

主なイベントは、24日、花園中学校体育館で、「紀の川太鼓」のアトラクションや地元



住民・中学生の郷土芸能、イデス・ハンソンさんの講演会。同グラウンドでは紀州ふるさと産品直売、体験コーナー(木工教室、餅つき他)が2日間開催される。他に、ヘリコプターによる山村空間体験、山村と都市の子供交流会、夜はバーベキューパーティーとかがり火交流会が開かれる。翌25日は、桂文珍の講演会、ミルク劇団によるミュージカル「パロン石はどこいった」、餅まき、動物とのふれあい

ミニ動物園などの他、有田川ではエンテューロラリー、つり大会なども。

参加自由、無料。あなたも訪ねてみませんか。

花園村への交通機関は、南海高野線高野山下車、バスまたは有田鉄道で。宿泊所は村内に民宿旅館があるが、予約が必要。

●問い合わせ／和歌山県花園村役場内ふるさとふれあいフェア事務局 ☎0737(26)0321

### 繭クワフト講座も

「養蚕女性さいわい塾」山梨県では、繭価が低迷し

ている養蚕農家の振興と、生糸の素晴らしさを生活に生かしていくため「養蚕女性さいわい塾」を今年4月に開設した。

かつては農家の半数近くが養蚕を行っていたが、現在山梨県内では2000戸余になり、従事者も高齢化している。

そのため県蚕糸農産課では、養蚕農家女性のアイデアを取り入れながら養蚕を育成し、併せて生糸や繭の伝統工芸の伝承、養蚕の新技术習得等を普及していくことになった。平成4年度の主な事業は、3蚕業指導所に各20名の女性を一度過疎問題を広域的見地に立った幅広い視点でトータルに見つめなおしていこうというのが今年のテーマ。

## 「過疎・新しい思想を求めて」をテーマに 全国過疎問題シンポジウム、大田市で開催

過疎問題について行政担当者をはじめ過疎地域住民、活性化問題の実践者、マスコミ等が一堂に会して討論、意見交換する「全国過疎問題シンポジウム」が島根県大田市で10月22日、23日に開催される。平成4年度のメインテーマは「過疎・新しい思想を求めて」。過疎地域対策緊急措置法は昭和45年に制定され、以来

20余年にわたり、交通通信体系の整備、教育文化施設、生活環境施設の整備等が講じられ、着実に成果をあげてきた。しかし過疎地域では長年にわたって人口減少、特に若者の流出が続く、著しい高齢化を迎え、近年では人口の社会減に加えて自然減も加わり、新たな過疎問題が生じている。このような状況の中で、い

基調講演は編集工学研究所松岡正剛所長で情報化時代と地域のあり方を語る。分科会は3会場で「女性・まちの輝き」「定住・地域の魅力を生かす」「交流・開かれたまち、開かれた心」をテーマに。

●問い合わせ／全国過疎問題シンポジウム実行委員会事務局 島根県総務部地方課 ☎0852(22)5065

を募集し、活性化について意見やアイデアを出してもらおうモニター制度の設置、農閑期を利用した蘭クラフト講座、新技術を学ぶリーダー研修会が予定されている。

当方は養蚕農家女性を対象にするが、将来は都会の女性も含めて養蚕をやりたい人やつむぎ織りを習いたい人の塾も開設していく計画である。

●問い合わせ／山梨県蚕糸農産課 ☎0552(37)1111  
(内)3782

なお、山梨県では河口町大石地区がつむぎの里として有名だが、今年から自分たちでかいこから育てて繭を取り、その生糸でつむぎを織ろうと養蚕農家が新たに5戸加って70アールの桑畑を造成、養蚕の振興に取り組んでいる。

### ふるさと情報プラザ 新宿にオープン

(助)地域活性化センター運営による「ふるさと情報プラザ」。「RIPL」が今年6月、東京新宿の京王プラザホテル一

階にオープンした。

従来のふるさと情報発信事業や地方の特産品・支援事業をさらに充実し、一般の人が活用できることをめざすもの。

場所は、いま最もにぎわう新宿副都心4号街路と信託ビル、KDDビルを結ぶ京王プラザナードと呼ばれるストリート(西口から徒歩5分)にあり、展示物面積は200㎡。全国の物産、観光、イベント、Uターン情報、ふるさと会員制度、首都圏住民を対象とした住宅・宅地情報などが

すべて入手できる。

コンピュータに入力された情報は17万件、観光情報は10万件にも達しており、各市町村の刊行物やビデオ観光・物産パンフレットもほぼ取り揃えている。

「RIPL(リップル)」とは「さざ波」という意味。ふるさと情報をさざ波のように都会人に伝えていくのがねらいだという。火曜日休館。

●新宿区西新宿2-2-1  
☎03(33340)2666

### 175(38)2111 但東シルクロード会員募集中

本誌で紹介(25頁)のシルクロードのまち但東では「シルクロード会員」を募集中。会員には①町内で収穫した季節の産品や懐かしい手づくり味などをセットにして年2回、春と年末に宅配便で届ける②いもほり、魚つかみ、特産品展示即売会など「ふるさとまつり」に招待③ふるさと料理講習会や竹細工、ちりめん小物手づくり講習会等に招待④町の施設を割引で利用できる。

会員は個人(世帯)1口1万円、法人5口・5万円他。

### 第7回日本秘境サミット 矢部会議を開催



日本むらおこしセンター(理事長/奈良県十津川玉置村長)では、秘境と呼ばれる町村が集い、ふるさと創生や活性化をめざして「日本秘境サミット」を開催してきたが、今年10月2日(金)に福岡県八女郡矢部村を会場に開催する。テーマは「生命の根源・水と緑を守る『むらの新時代』をいかに創るか!」。いま水と緑の問題が警告されているがその自然を守ってきたのは秘境とよばれる山村。しかし山村生活者はオアシスの中に生きているという、アイデンティティを持ち得ないのが現況。そこでこの矢部会議を通して、水と緑を守るむらの新時代をいかに創るかについて話し合う。

基調講師は女優の栗原小巻さん、「日本秘境村への期待」と題して講演する。また、パネルディスカッションには三重大学伊藤達雄教授、九州大学古良今朝芳教授、詩人工藤直子さん、国土庁地方振興局斉藤恒孝課長、矢部村若杉繁善村長らが予定されている。費用は参加費4000円、懇親会費6000円。●問い合わせ ☎0943(47)3111 矢部村役場企画財政課へ。



### 北海・天然の 鮭や昆布を産直で

北海道は農産物の宝庫。ふるさと会員制による農産物宅配も最も盛んだが、今回はえりも町のおいしい新巻鮭、日高昆布、いくらなどの直送便を紹介しよう。12月、正月用に合せて送ってくれて、しかも価格もおトクなのが嬉しい。ゴールドコースは、銀毛

新巻鮭、日高昆布、いくら、紅葉子で1万円。筋子、昆布、昆布巻のシルバークコースが5000円。新巻鮭、昆布にその他いろいろ入れたファミリークコースが5000円。11月までに申し込むこと。

●問い合わせ／北海道札幌市東区もも町商工会 ☎011466(2)2241

自慢の海の幸、山の幸を  
津軽半島から新鮮パック

本州北端、津軽半島からの海の幸を中心にしたふるさと便はいかが。

蟹田町はその名の通りカニを中心に白魚、ホタテなどの海産物を年3回宅配、岩崎村はイクラや海賊罐詰、ささえ、

アワビなどを年4回、川内町はホタテ、山菜、長いもなどを年3回セットにした「ほのぼの宅配」、佐井村は甘塩うに、さけ燻、ひじき、干し魚などを年3回パックにした「ラブリーさい」などがある。

新鮮でおいしい自慢の海の幸、山の幸である。価格は多少の変動もあるため、詳しくはお問い合わせを。

●蟹田町商工会村おこし委員会 ☎01174(22)2441

●岩崎村商工会ふるさと岩崎友の会 ☎01733(7)2340

●川内町ほのぼの宅配かわうち ☎0175(42)2301

●佐井村役場農林経済課 ☎0



●問い合わせ／兵庫県出石郡但東町正法寺但東シルクロード協会 ☎0796(54)0141

### 日本一小さい村富山の心のもつたふるさと便

長野県境に接する富山村は赤石山脈南部の奥深い森の中にある美しいオアシス。村の中央を天龍川がゆったり流れ下流には佐久間ダムがある。ダムによる水没などで人口は201名。しかし人口が少なからこそ、村民一丸となって何でもやれると、村営の珈



琲ハウスや理髪店もある。保育園児3名に保母さん2人、小中学生19人に先生20人と、子供達にとって天国のような環境。山村留学制度もある。お母さん達が熱心に取り組んでいるふるさと産品は安全でおいしい手づくり品と好評。この地方で代々伝承されてきた銘茶「赤石」、しその葉でじっくり漬けこんだ梅干、各種漬物、村の木板で作った「板もち」など。独特のコクと歯ごたえがある芳しい餅だ。セット3000円から、バラ売りもOK。

●問い合わせ／愛知県北設楽郡富山村役場 ☎05368(9)2011

### 福祉の里、沢内村の母と子の手づくり産品

老人医療無料など独自の生命行政で知られる岩手県沢内村では心身障害者(児)のために福祉作業所を設け、昭和60年からふるさと宅配便事業を行っている。家族の会や婦人会、老人クラブ、青年ボランティアなどが協力、まごころをこめた産直品や手づくり品が年4回送られる。例えば、秋の便はリンドウ、じゃがいも、とうもろこし、枝豆、ハチミツ、いちごジャム、ニジマスの甘露煮。正月前には門松、餅、豆類などが届く。手づくりの料理メモやふるさとの便りなども嬉しい。1口1万5000円。

●問い合わせ／岩手県和賀郡沢内村社会福祉協議会 ☎0197(85)3225



### 雪だるまの宅配便「雪のふるさと」安塚町

新潟県安塚町では毎年2月の雪上フェスティバルに県内に住む東南アジアの留学生を招待したり、住民出演で野外劇「雪太郎物語」を上演するなど、雪のふるさととして積極的な活動を行っている。とくにユニークなのが雪だるま「スノーマン」の宅配。宅配は年間を通して行われ、夏は雪10kgに竹筒に入った水羊羹や冷やむぎ、冬は新雪にステーキ用安塚牛、わら靴のセット「雪国気分」(6500円)やクリスマスグッズ「雪だるまくん」(4000円)がありスノーマンだけでもOK(雪15kg、3500円)。

●問い合わせ／新潟県東頸城郡安塚町役場内・雪の宅配便 ☎02559(2)2003



## 編集後記

■今回積極的な交流事業で地域の活性化をめざす町村を訪ねて存在を感じたことは、一人ひとりの存在がいかに重味を持っていかるといふこと。子育てしながら農業や地場産業の重要な担い手である若い母親たちは、地域活動にも積極的に参加している。大川村では一人が10人並みのパワーを発揮していた。但東町では青年のように若々しい中高年者たちが印象的だった。人生に充実を求める都会人、田舎をめざすべし。(A)

■古いつき合いの友人に数年ぶりに会ったが、典型的な都会のサラリーマンである彼の目下の関心事は仕事、老後の暮らし、子供のこと。環境問題、自分の故郷の過疎化や農業問題などは自分以外の誰かが考えてくれると思っただけだ。この本は、そんな都会の人間にこそ、もっと読ませたい。(K)

## でぼら

No.3('92秋冬号)

発行日／平成4年9月15日

発行所／全国過疎地域活性化連盟

〒100 東京都千代田区永田町1-11-35

全国町村会館6階 ☎03(3580)3070代

編集協力・印刷／櫛ぎようせい

■協力／(財)地域活性化センター

(財)ふるさと情報センター

# 北の自然と心の温もり「白い器」

「オケクラフト」のまち(北海道置戸町)



オケクラフトセンター・森林工芸館と「白い器」。1階に展示即売コーナーがある。



木材をくりぬいて手作りした木太鼓が人気の山神太鼓祭り。



子供たちの学校給食もすべてオケクラフトを使用。

「綱引き日本一」「人間ばん馬」レースで全国にその名を知られる置戸町は町の86%が森林原野を占める木と木材のまちで、たくましく力強く生きようと仲間たちと呼びかけ、さらに置戸の木材を外に向けてPRしようという発想から生まれたのが「綱引き大会」「人間ばん馬」レースである。「人間ばん馬」は北海道の夏のイベントとして恒例になり、その日は人口5000人のまちが一挙に4倍の2万人にふくれ上がる。

昭和57年に開設したのがオケクラフトセンター「森林工芸館」。町でとれるエゾ松、カラ松に付加価値をつけて町の産物として活用したいと研究を続けてきた結果、そのままではやわらかくて食器などには適さないが、樹脂含浸強化法の活用で、耐熱性、耐水性、耐久性にすぐれた新しい木工品が誕生した。オケクラフトセンターには東北工業大学第三生産技術研究室の技術者や若手の工芸作家、地元の工芸家など約30名が勤務、あらゆるジャンルの「白い器」を製作している。町内にもいくつかの工房があり、道内外から見習い修業にやってくる若者が多くなった。

白く明るい木肌、それでいて温もりを感じさせてくれるオケクラフトは学校給食の子供たちにも人気がある。また、夏祭りの最後を飾る「山神太鼓」も、直径1m以上の木幹をくりぬき板を張ったユニークな木太鼓。木材の町にふさわしく牧歌的で勇壮な音である。



●森林工芸館／北海道常呂郡置戸町  
439-4 ☎0157-52-3170

# 世界の芸術・文化が会う大自然の理想郷

〈利賀そば祭り〉が加わって(富山県利賀村)



冬開催される〈利賀そば祭り〉も人気行事の一つ。



利賀フェスティバル'92  
■ 瞑想の館・内部



「芸術と文化の山里」としてす  
っかりおなじみになり、都会の  
若者にも人気のある利賀村。毎  
年夏に開催している利賀フェス  
ティバル「世界芸術祭」は今年  
で11回目。海外からも著名な演  
出家や舞台俳優が来村。また舞  
台は池や野原を使って壮大な花  
火があるという利賀ならではの  
スケールでまたまた話題を呼  
んだ。

利賀村のもう一つのイベント  
が「世界そば博覧会」で、利賀特産そばをは  
じめ、世界のそばが一堂に会して各国のそば  
料理を披露した。また、冬には「利賀そば祭  
り」、秋には「利賀山祭り」が開かれ、年間に  
通して都市住民との交流が積極的にすすめら  
れている。

ネパール王国ツクチエ村との姉妹、友好都  
市交流により誕生したのが巨大マンダラ絵の  
ある「瞑想の館」。周辺にはそれにふさわしい  
公園、森、散歩道等を整備中である。近くの  
「利賀そばの郷」では、全国で唯一のそばの  
資料館があり、そばの原産地ヒマラヤの山岳  
民族資料も展示している。

古い農家を改造して作った劇場「利賀山房」  
やギリシヤ風野外劇場を再現した野外ステ  
ージ、ホール、  
郷土玩具美術  
館や利賀民族  
館、さらにス  
キー場やキャ  
ンプ場など、  
村全体がワク  
ワクする文化  
の里である。



●富山県東砺波郡利賀村利賀 171  
☎0763-68-2111 (役場)

# 壮大な歴史とロマンが甦る

水軍・安東文化発祥の地(青森県市浦村)



- ↑中の島遊歩道。十三湖の美しさが心洗われるよう。
- 中の島湖畔でキャンプをする小学生たち。
- ↓左/市浦村役場と青森あすなろホール、右/地域活性化センター



市浦は津軽半島の北西部に位置し、西は日本海、南は十三湖、そして彼方には岩木山を望む風光明媚なむら。昔、十三湊と呼ばれていた頃は、水軍で名高い安東氏が支配するみちのくの商港として栄えたが、突然の大津浪により人も船も十三湖底に沈んだといわれ、その歴史は多くの謎と伝説に彩られている。

市浦村では、福島城跡、唐川城跡、山王坊遺跡など、安東氏にかかわる歴史的資源を生かして「安東文化のふるさと」として地域おこしをすすめており、中世津軽の史都として多くの話題をよんでいる。

一方、十三湖を中心とした観光開発や、地場資源を活用した物産づくり、自然とのふれあいをテーマにした施設や行事も年間を通して積極的に行われている。

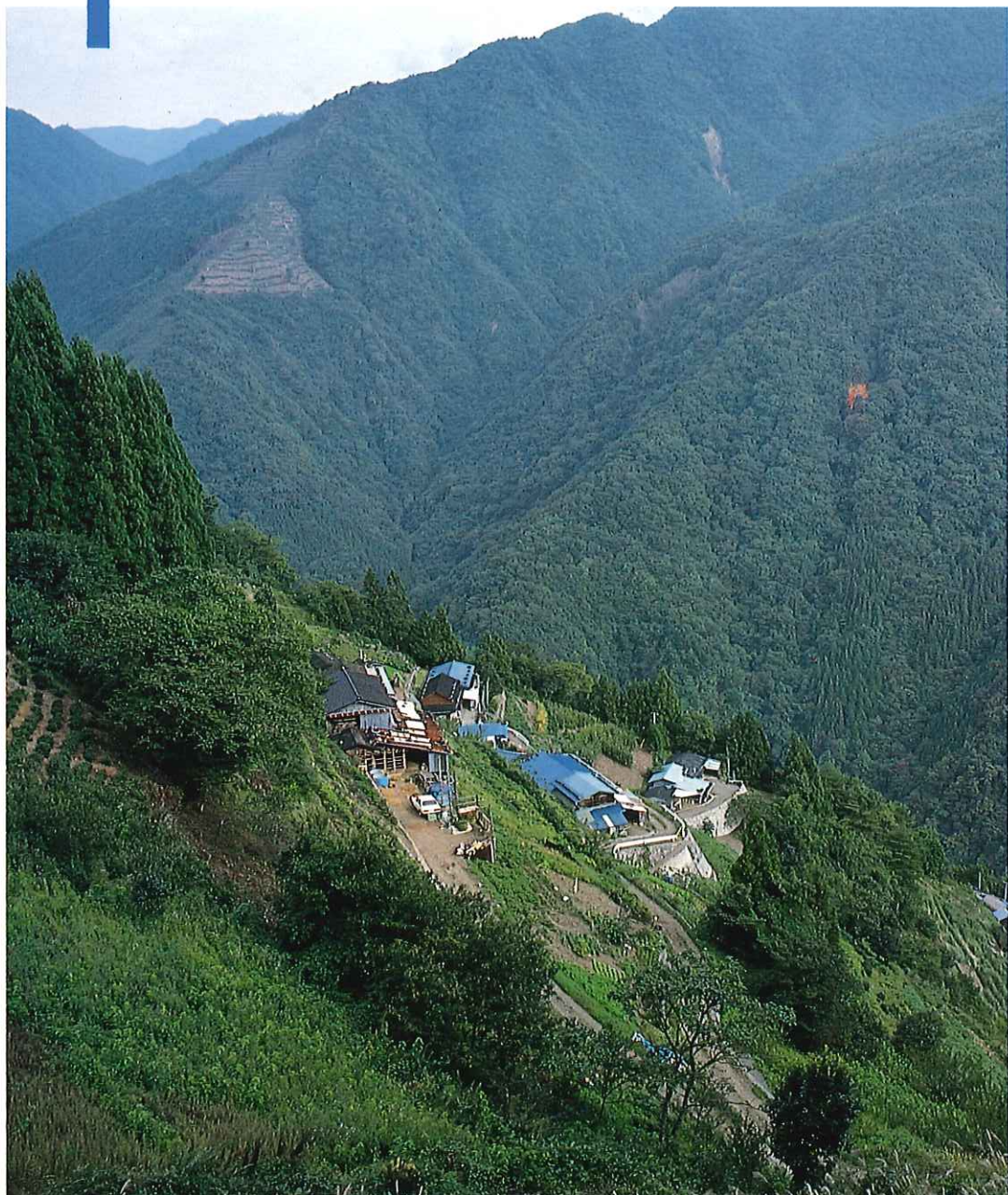
十三湖畔、中の島に誕生したブリッジパークには地域活動の拠点となる地域活性化センターや歴史民俗資料館、ケビンハウス、ローラスケート場、水上ステージなどがある。海辺にはモダンなサマーハウスや鯨御殿を復元したセミナーハウス、また村内には地元産のヒバ材を使った木材工芸センターや農水産物加工センターなどがあり、加工販売している。建物といえば、木造建築物として日本一の高さを誇る青森あすなろホールと木のぬくもりにあふれる役場庁舎が有名。施設の整備で「自ら考え自ら行う」住民参加の村づくりが熱心だ。



●青森県北津軽郡市浦村組内  
☎0173-62-2111(役場)

## 日本の原風景——日本のチロル・しもぐり下栗の里

かつて日本人は、陽当たりがよく河川の氾濫の心配が少ない山の天っぺんを好んで生活してきた。ここ赤石山脈の一角にある遠山郷(長野県下伊那郡)には南斜面に集落が点在し、古い歴史と文化を育んでいる。標高1000mの下栗の里は特に南アルプスを一望する景勝地で、気候も温暖な農作物、山菜の宝庫。学校の廃校で若い住民はみな下へ降りてしまったが、学校跡地に村営ロッジが出来て以来、観光客も増え、里に活気が出てきた。国指定の郷土芸能「霜月祭」や伝統歌舞伎が傳承されている地域でもある。(長野県下伊那郡上村)



●本誌に対するご意見、ご感想、ご提言をお寄せください。——住所、氏名、職業、年齢、電話番号を明記のうえ、全国過疎地域活性化連盟「でぼら」係(〒100 東京都千代田区永田町1-11-35全国町村会館内/TEL.03-3580-3070)までハガキか封書でご送付ください。

# いつも恋を

# しているみたい。

ははは、どきどき、わさわわ  
宝くじは恋する気分にノックです。

(本誌は、財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成したものです)

てぼら No.3

平成4年9月15日発行

発行／全国過疎地域活性化連盟

〒100 東京都千代田区永田町1-11-35 全国町村会館6階 ☎03(3580)9070代

宝くじ

財団法人 日本宝くじ協会